

豊 後 府 内 10

大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター

豊 後 府 内 10

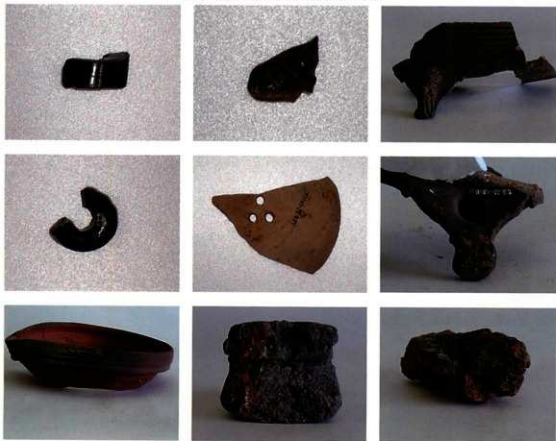
大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 (6)

2008

大分県教育庁埋蔵文化財センター



中世大友府内町跡調査区透景（下中央）



出土遺物写真

序 文

本書は、大分県教育委員会が大分県大分駅周辺総合整備事務所の依頼を受けて実施した大分駅付近連続立体交差事業に伴う中世大友府内町跡第40次調査の発掘調査報告書です。

大分市には旧石器時代の丹生遺跡や縄文時代の横尾貝塚、弥生時代の下郡遺跡を初めとして、古代の豊後「国府」、中世の大友氏府内町跡があるなど古い歴史と文化をもつ地域です。

今回調査した遺跡は中世大友府内町跡のうち、大友氏館跡東側を調査した報告書です。調査では16世紀の遺構・遺物を多数検出し、これらの事実からこの地で活発な生活行動が展開されたことを明らかにすることができました。

本書が、埋蔵文化財の保護に向けて、また地域の先人の生活を理解する資料として、さらには学術研究の一助として活用されれば幸いです。

終わりに、発掘調査から報告書刊行に至るまで多くの方々の御理解と御協力をいただきました関係各位に、衷心から感謝申し上げます。

平成20年3月25日

大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 長 福 田 快 次

例 言

1. 本書は大分市元町に所在する中世大友城下町跡第40次調査区の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は大分駅付近連続立体交差事業の実施に伴い、県土木部大分駅周辺総合整備事務所の委託を受けて大分県教育委員会が実施した。
3. 現地調査は平成16（2004）年4月20日から5月25日にかけて実施し、高橋信武・生野令子・古庄博之が担当した。
4. 現地での写真撮影・遺構実測等は調査員が担当した。
5. 遺物洗浄・遺物注記・遺物接合・遺物実測・トレースなど報告書作成に伴う諸作業については、大分県教育庁埋蔵文化財センターで調査員及び整理作業員が行った。遺物洗浄・注記・接合・復原作業は安部典子・後藤一美が担当し、遺物実測は高橋信武のほか、赤嶺博美・小野千恵美・田嶋智子・西嶋スミエが担当した。
6. 包含層出土の遺物に対する注記は上層から、B（黒色土の上位）、A層（黒色土）、C層（黒色土直下）、D・E（黒色土下位の黒褐色土）、F（1・区の地山直上2）とした。
7. 出土遺物ならびに図面・写真等は、埋蔵文化財センター（大分市大字中判田字ビワノ門1977）において保管している。
8. 本書で使用する方位はいずれも座標北である。また、国土座標は2002年4月1日改正以前の座標値を使用している。
9. 本書の執筆・編集は高橋信武が行った。

目 次

第1章 調査の経緯と周辺の環境	1
1. 調査に至る経緯	1
2. 遺跡の立地と環境	1
第2章 調査	1
1. 調査の概要	1
2. 層序	1
3. 遺構と遺物	1
①最上層の遺構と遺物	8
②上層の遺構と遺物	11
③中層の遺構と遺物	24
④下層の遺構と遺物	30
⑤最下層の遺構と遺物	32
第3章 まとめ	65

写真図版

図 版 目 次

第1図 中世大友城下町と調査区の位置	3
第2図 町割り(左)と調査区(右)	4
第3図 第40次調査区の位置	5
第4図 調査区北壁層序図	6
第5図 調査区東・西・北層序図	7
第6図 最上層遺構・擾乱配置図	8
第7図 最上層の擾乱	9
第8図 SD1実測図	10
第9図 SD1出土遺物実測図	10
第10図 上層遺構配置図	11
第11図 SK5~7実測図	12
第12図 SK5~7出土遺物実測図	13
第13図 SP3・SK4・8・12実測図	14
第14図 3区遺構実測図	15
第15図 SK4・12出土遺物実測図	16
第16図 SD19実測図	17
第17図 SD19出土遺物実測図	17
第18図 SX26実測図	18

第19図	SX26出土遺物実測図	19
第20図	SK21実測図	20
第21図	SK2出土遺物実測図	21
第22図	SK31実測図	22
第23図	SK31出土遺物実測図	23
第24図	中層遺構配置図	24
第25図	SK 8 実測図	25
第26図	SK 8 出土遺物実測図	26
第27図	SK11出土遺物実測図	27
第28図	SK11実測図	27
第29図	SK23・25実測図	28
第30図	SK25出土遺物実測図	28
第31図	SK29・31実測図	29
第32図	SK29・31出土遺物実測図	29
第33図	下層遺構配置図	30
第34図	SK33実測図	31
第35図	SK33出土遺物実測図	31
第36図	最下層遺構配置図①	32
第37図	SK42出土遺物実測図	33
第38図	SX46・SD44・SK45・47実測図	34
第39図	SK47出土遺物実測図	35
第40図	SK50実測図	36
第41図	SK48遺構及び出土遺物実測図	37
第42図	SK48出土銭貨実測図	38
第43図	最下層遺構配置図②	39
第44図	SK46出土遺物実測図	39
第45図	1・2区の標高4.4m前後の遺物出土状況	40
第46図	平面図にある遺物実測図	41
第47図	包含層出土遺物実測図	42
第48図	包含層出土遺物実測図	43
第49図	包含層出土遺物実測図	44
第50図	包含層出土遺物実測図	45
第51図	包含層出土遺物実測図	46
第52図	包含層出土遺物実測図	47
第53図	包含層出土遺物実測図	48
第54図	包含層出土遺物実測図	49
第55図	包含層出土遺物実測図	50
第56図	包含層出土遺物実測図	51
第57図	包含層出土遺物実測図	52
第58図	包含層出土遺物実測図	53
第59図	包含層出土遺物実測図	54
第60図	包含層出土遺物実測図	55

第61図	包含層出土遺物実測図	56
第62図	包含層出土遺物実測図	57
第63図	銭貨実測図	58
第64図	土層図中の遺物実測図	58
第65図	第13次調査区との関連	66

表 目 次

第1～8表	出土遺物観察表	59～64
第1表	遺構一覧表	67

写真図版目次

巻頭写真図版

写真図版 1	69
写真図版 2	70
写真図版 3	71
写真図版 4	72
写真図版 5	73
写真図版 6	74
写真図版 7	75
写真図版 8	76

第1章 調査の経緯と周辺の環境

1. 調査に至る経過

大分駅高架

大分県では、大分駅周辺の整備を進めており、大分駅高架化事業に伴い線路の高架化及び位置の小規模な移動等が行われる。JR日豊本線・豊肥本線は現在の場所から折り返したように南側に高架として作り替えられるため、敷地内の遺跡が発掘調査の対象となっている。この一帯は中世大友氏の城下町があった場所であり、今日までに国道10号の西側では大友府内町跡の第5次調査（平成11～13年度）、第8次調査（平成12年度）、第10次調査（平成13・14年度）が行われ、東側では第7次調査（平成12・13年度）、第16次調査（平成13年度）が行われて、すべて発掘調査報告書が刊行済みであり、中世段階はもとよりそれ以前の古代遺跡の存在も明らかにされている。今回報告する第40次調査区は国道10号とJRが交差する場所にあたり、大分駅周辺総合整備事務所の工事箇所であるため、その委託を受けて大分県教育委員会が下記の体制で発掘調査を実施したものである。

2. 調査の体制

所在地	大分市元町	
調査期間	平成16（2004）年4月20日～5月25日	
調査面積	170㎡	
事業主体	大分駅周辺総合整備事務所	
調査指導者	河原純之（千葉大学文学部教授） 後藤宗俊（別府大学文学部教授） 小野正敏（国立歴史民俗博物館助教授） 坂井秀弥（文化庁記念物課埋蔵文化財担当調査官）	
調査主体	大分県教育委員会	
調査組織	埋蔵文化財センター所長	伊藤正行
	次長兼総務課長	益永孝剛
	調査第一課長	高橋 徹
調査担当	主幹	高橋信武
	囑託	生野令子
	囑託	古庄博之

2. 遺跡の立地と環境

縄文時代

別府湾に注ぐ大分川下流域は、屈曲した古河川がいくつも平野の下に埋没している。右岸の下部では土地区画整理事業や県道米良バイパス建設工事に伴う発掘調査により、縄文時代後期（約3,500年前）の遺物が広域に散漫に出土している。今までの所、後世の遺物に伴い攪乱状態で発見される事が多いが、下部桑苗遺跡では貯蔵穴1基も検出されており、大分平野下流域の一部では縄文後期には生活できる状態になっていたことが分かる。

弥生時代

弥生時代になると急激に遺跡が増加する。低地部では、初めは大分川右岸の自然堤防上や明野丘陵の裾部、大分川左岸では市街地西側の山室地区の砂丘上、市街南部の上野丘陵裾の砂丘上等平野周辺部にみられるが、中期・後期になると全域に分布するようになる。

古墳時代

古墳時代の遺跡も同様である。古墳は東側の明野丘陵の崖面に横穴墓群が造られる。

古代

7世紀後半になると、左岸地域には壬申の乱で活躍する人物や評段階の官衙遺構が現れる。8世紀以降、上野丘陵に豊後国府が設置されたと考えられている。一方、右岸では下郡という名が示す

ように国府の下に位置づけられる大分郡衙が位置したと考えられている。大友城下町地域においても、JR日豊本線の南、国道10号の東である第7次調査区で検出した建物跡は、国府から海部郡衙（大分市城原）に向かう渡河点に関わる遺構の可能性が指摘されている。他の調査区でも同じく、古代の遺構・遺物が一定量出土しているが、明確な性格は判明していない。9世紀代までは同様の状況で推移するが、10世紀頃から13世紀にかけて、この地域から遺構・遺物が減少する。大友城下町地域では、14世紀になると広範囲に遺跡が出現する。

第2章 調 査

1. 調査の概要

第40次調査区は大友氏館跡の南東側に位置する。

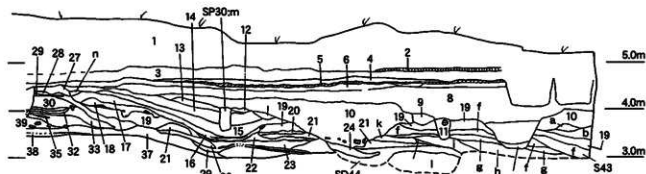
調査区はJR日豊本線・豊肥本線のすぐ南側に隣接しており鉄道の安全の為、工事区域全体を調査することは出来なかった。調査区の南側は金池放水路というコンクリートで作られた大型溝が東西方向に走っていた。調査区の端は溝に向かって斜面となっていて、調査が進むにつれて、下層に向かうにつれて調査可能な部分が南側に拡大していった。

また、大友第40次調査区は調査前の地形は平坦であったが、掘り下げが進むにつれて中央部分から東では東部に向かって地形が傾斜する状況だった。しばらくの間、全城を水平に掘り下げて調査したため、西部は古い面で、東部はそれより新しい遺物包含層を調査しているといった状態が続いた。したがって遺構番号の付け方は調査終了時点で見直せば西部の古い遺構に若い数字がつき、東部の新しい遺構に古い番号が付くという状況にもなった。特に東部では、西から東に向かって廃棄された土層が細かく堆積していたため、調査時点で順序正しく遺物を採り上げることが出来なかった。残念ながら報告書作成段階でもその影響を消すことは出来ないままであった。

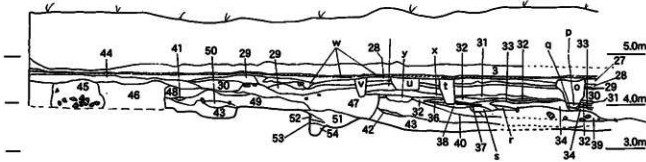
調査の経過について、概略を記しておく。2004年4月20日、表土剥ぎと現場プレハブの設置、機材・発掘道具の移動を行い、26日から攪乱層の除去、壁面の削りだしを実施。27日、攪乱土坑・溝の掘り下げ。鉄道の伴う配線を埋設した溝が東西に走っているのを掘りあげた。この時点では調査区北側層序を上層から、1層（攪乱層）・2層（旧表土）・3層（水田層）・4層（灰褐色土。この層まで重機で表土剥ぎを行った）・5層（暗灰褐色土）・6層（暗灰茶褐色土）・7層（暗褐色土）・8層（整地層）である。配線埋設溝は5層に掘り込んでいた。28日、東部でS1を完掘。4層を埋土としていた。S2を西端の5層上面で検出、完掘。但し埋土は4層ではなく褐色の強いもの。中央部と東端の5層を下げる。南側の攪乱との境界線を全体的に出す。5月10日、西部は5層（水田床土）を下げる。11日、中央部は褐色硬土の下に黒色土となる。12日、SK11の北東部に焼土が広がる。14日SD19を検出、掘り下げる。17日、SK23から緑色のガラス出土。18日、SK11の外側に向かって包含層の調査。遺物は黒色土と下層の褐色土との境界付近から主に出土。19日、SK24を終了し、地山である褐色土・黒色土を下げる。24日、S46をS45が切ることを確認。

2. 層序

調査区東部には土師器を纏めて廃棄した状態の堆積層が重複していた。その付近の遺構との上下関係について、触れておきたい。中央部のSK11は30層に該当する高さから掘り込まれている。SK24はSK11よりも下層の33層付近から掘り込まれている。3区東端の土層を多量含む層（e層）は標高的にはSK29やS43の少し上である。西側のS46とした遺物包含層はほとんどS39やS42、1層と区別し難い。SK44はわずかにこれらよりも下から掘り込まれている。上記全部よりも上層の10層は



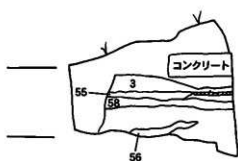
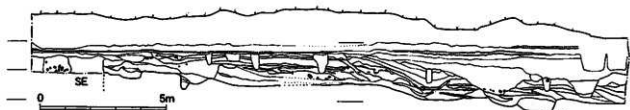
- | | | |
|--------------------------------------|--------------------------|---------------------|
| 1: 零土。 | 25: s44 | 49: 明茶褐色土。細粒で軟質。 |
| 2: 3cm大の石を多量含む砂層。 | 26: 茶褐色砂質土。炭化物・焼土塊を含む。 | 50: 茶褐色。炭化物の塊を多く含む。 |
| 3: 旧表土。暗褐色砂質土層。 | 27: 明茶褐色土。 | 51: 灰茶褐色土。硬い。S49 |
| 4: 水田跡。 | 28: 明茶褐色土。 | 52: 茶褐色土。S49 |
| 5: 水田跡土の酸化して硬化した部分。明褐色土。 | 29: 茶褐色土。炭化物少量が混じる。 | 53: 暗茶褐色土。S49 |
| 6: 水田土層。明褐色。 | 30: 暗茶褐色土。砂利を多く含む。 | 54: 茶褐色土。S49 |
| 7: 6と同じ。 | 31: 灰茶褐色土。炭化物・土器片が混じる。 | |
| 8: 明褐色砂質土。SD1 | 32: 明茶褐色土。 | |
| 9: S26 | 33: 灰茶褐色土。炭化物・土器片を含む。 | |
| 10: 暗茶褐色土・炭化物・焼土塊を含む。10'は10層よりも少し薄い。 | 34: 茶褐色土。 | |
| 11: 暗茶褐色土。 | 35: 砂層。 | |
| 12: 灰白色砂層。 | 36: 明茶褐色土。炭化物を含む。 | |
| 13: 砂層。 | 37: 炭化物層。 | |
| 14: 茶褐色土。炭化物・土器片をまばらに含む。 | 38: 明茶褐色土。 | |
| 15: 明茶褐色土。炭化物・黄褐色土塊を含む。 | 39: 茶褐色土。 | |
| 16: 土器片主体の層。 | 40: 暗茶褐色土。少量の炭化物を含む。砂質。 | |
| 17: 明茶褐色土。炭化物・黄褐色土塊を含む。 | 41: 暗茶褐色土。小礫混じり。 | |
| 18: 17層とほぼ同じ。炭化物が多い。 | 42: 茶褐色土。 | |
| 19: 茶褐色土。砂混り。炭化物塊を少量含む。 | 43: 明茶褐色土。S48 | |
| 20: 黒褐色土と下層の砂が混じる。 | 44: 明茶褐色土。炭化物・焼土をまばらに含む。 | |
| 21: 茶褐色砂質土。 | 45: 灰茶褐色土。軟質。SE36 | |
| 22: 灰褐色砂質土。炭化物を含む。 | 46: 明茶褐色土。少量炭化物を含む。SE36 | |
| 23: 明茶褐色土。上部に炭化物の薄い層がある。 | 47: 茶褐色土。細粒で硬質。炭化物を含む。 | |
| 24: 粘性ある茶褐色砂層。 | 48: 明褐色土。砂混じり。 | |



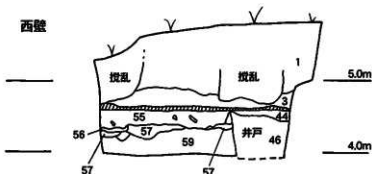
- | | |
|-----------------------|--------------------------|
| a: 茶褐色土がまばらに混じる暗褐色土。 | m: 黒色土をまばらに含む暗褐色土。 |
| b: 暗褐色土。 | n: 茶褐色土。軟質。S36 |
| c: 暗褐色土。SD19 | o: 茶褐色土。下位層は軟質で、炭化物を含む。 |
| d: 茶褐色土。 | p: 上部よりも軟い。 |
| e: 暗褐色土。土器片を多量含む。 | q: 暗褐色土。 |
| f: 茶褐色土。まらさらしている。 | r: 灰茶褐色土。粘性あり。 |
| g: 茶褐色土。軟質。 | s: 茶褐色土。 |
| h: 暗褐色土。軟質。 | t: 30層と類似。やや軟い。 |
| i: 比より厚く、土器片を多量含む。S39 | u: 同上。 |
| j: 灰褐色土。炭化物の層あり。 | v: 28層と類似。 |
| k: 明茶褐色土。 | w: 砂質土。 |
| l: 茶褐色土。 | x: 赤褐色土・茶褐色土の混じり。土器多量混入。 |
| | y: 土器を含む暗茶褐色土。 |

第4図 調査区北壁実測図

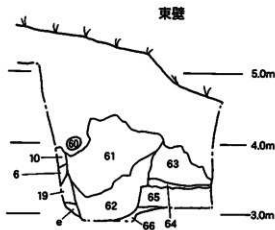
利用されていないとみられる。6層からは近世の煙管が出土。東部の8層中には幅広の溝状遺構(SD1)があるが、近世のものである。下面で検出した溝状遺構(SD19)から18世紀末の遺物が出土した。これからは斜めに堆積する状態で、調査終了時点での旧表土からの深さは西部で1m、東部で2mであった。小面積の調査区であったが、地形の傾斜のために、同時存在の遺構を調査時点で捉えつつ調査を進めることが出来なかった。斜面に投げ捨てた状態の遺物群相互の前後関係の把握も困難だった。



西壁



- 55: 色土。焼土を多量含む。
- 56: 黒褐色土。
- 57: 明褐色土。軟質。
- 58: 灰褐色土。
- 59: 茶褐色土。



東壁

- 60: 空間。
- 61: 炭化物を少量含む黒茶褐色土。
- 62: 黄褐色土塊を含む暗褐色土。
- 63: 明褐色土。
- 64: 暗褐色土。玉砂利をまばらに含む。
- 65: 粘性のある明茶褐色土。
- 66: 砂質土を含む暗褐色土。

第5図 調査区西壁(上)・東壁実測図

①最上層の遺構と遺物

概要 (第6図)

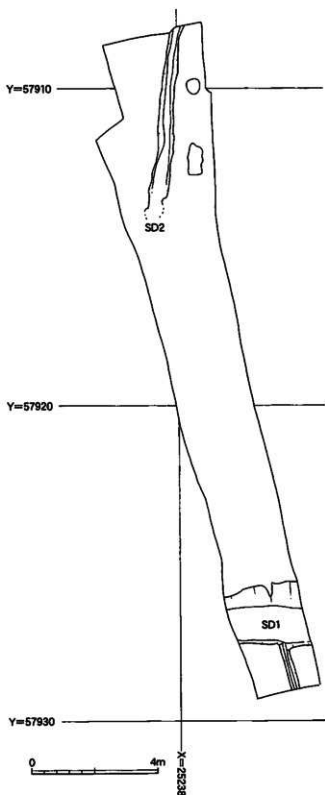
客土・床土を除去した段階で攪乱の溝・土坑を検出した。西端部の1区から2区の溝状のもの、及び東端部にあり東西方向に走る溝状のものは鉄道関係の配線用掘り込みである。2区の長方形土坑は電柱用のものである。水田地帯が鉄道用地になってからの攪乱類である。

溝状遺構

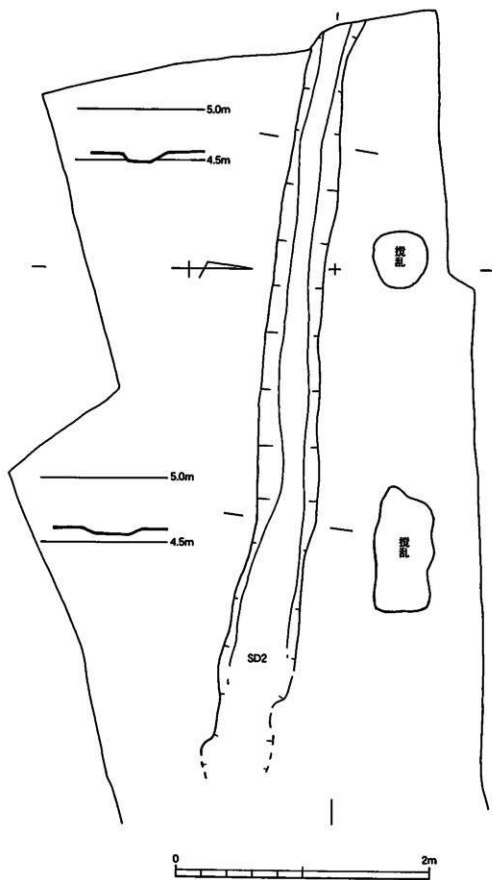
SD1 (第8図) 東端部で検出した溝状遺構SD1は上面幅約2m、深さ約0.5mの規模で、埋土である4層は上層の8層(明褐色砂質土)とほとんど同じであり、近世以降の遺構と推定する。5層(水田床土で酸化硬化層)に掘り込む形で検出した。

SD1出土遺物(第9図1・2) 1は型押成型の皿で、中国南部製。2は備前焼鉢で外底面にヘラ描きの紋様が見られる。

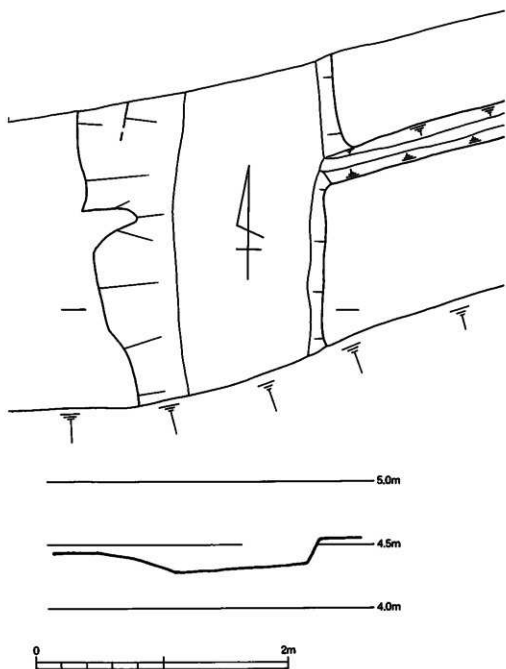
SD2 (第7図) SD1と同じく5層(水田床土で酸化硬化層)に掘り込む状態で検出した浅い溝状遺構である。上面の幅は東部で58cm、西部で30cm程度で、底は西に向かって下がる。SD2は東部では次第に消滅する。



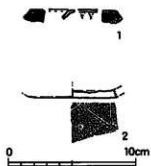
第6図 最上層遺構全体図



第7回 最上層の擾乱配置図 (1・2区)



第8图 SD1实测图



第9图 SD1出土物实测图

②上層の遺構と遺物

概要 (第10図)

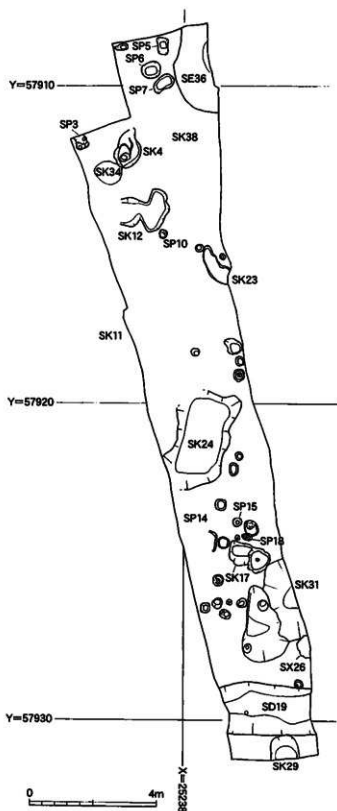
遺構は調査区全体に分布する。遺構検出面の標高は西部で4.5m以上、東部で約3.8mであり、東側が80cmほど低くなっている。遺構の種類は小型土坑が西部に多く、中央部に大型の長方形土坑、東部に南北方向の溝状遺構、中央部から東部に普通の柱穴大の小穴がまとまる傾向にあった。柱穴は調査区が狭小なためもあって、掘立柱遺物跡として復原想定するには至らなかった。西部の土坑群確認面のすぐ上には円礫が若干散乱していて、これを取り除いた段階で土坑群を検出した。円礫は遺構産絶に伴い堆積し、その後土坑は掘り込むような状態ではなかったようである。

16世紀末葉から17世紀中頃の遺構である。

土坑

SK 5 (第11図) 1区の西端で検出した長方形の土坑である。長さ0.53m、中央の幅0.33m、深さ0.38m。出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

SK 5 出土遺物 (第12図1～5) 1は京都系土師器3期。口縁部の二箇所に煤が付着し、灯明皿として使われている。2は16世紀末の中国龍泉窯系青磁碗B・V類で、沈線による蓮弁紋が描かれる。3は瓦質鉢。4は鉄釘。



第10図 上層遺構配置図

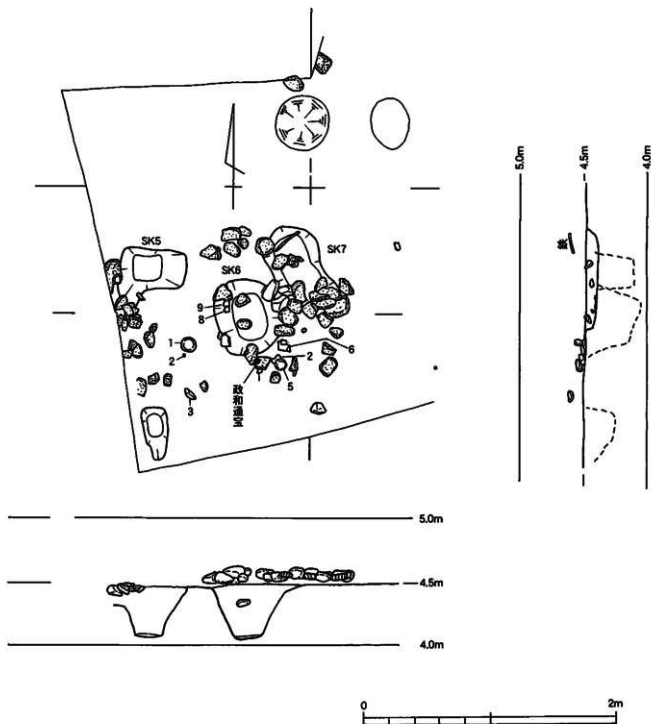
SK6(第11図) SK5の東側に位置し、検出面も同一である。長さ0.8m、幅0.73m、深さ0.43mである。検出状況から16世紀後葉~末葉の遺構と判断する。

SK6出土遺物(第12図6~8・11) 5は灯明皿として使われた3期の京都系土師器。6も京都系土師器。7は備前焼き大甕の近世1期。10は中国北宋の銭貨で政和通宝。

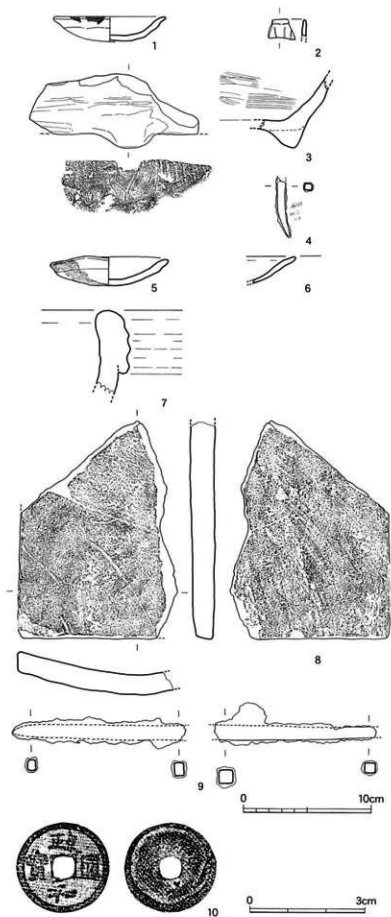
SK7(第11図) SK6の東に接して位置する。長さ0.78m、幅0.43m、深さ0.1m。検出状況から16世紀後葉~末葉の遺構と判断した。

SK7出土遺物(第12図8・9) 8は平瓦。9は折れているが長さ18cm以上の鉄釘。

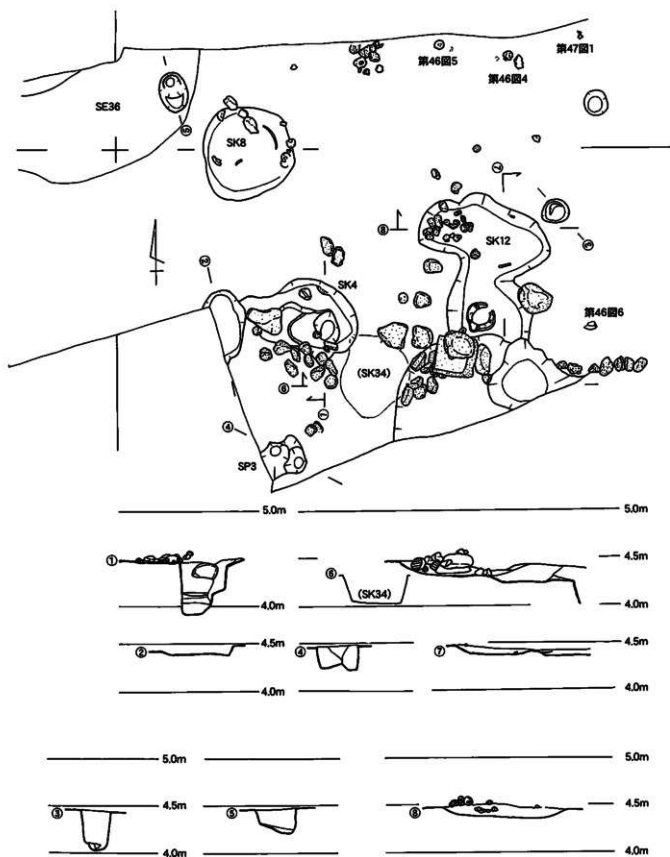
第11図中の遺物(第45図1・2・3)



第11図 SD5~7実測図



第12図 SD5~7出土遺物実測図



第13圖 SK3・SK4・SK8・SK12実測図

SK4 (第13図) 2区西部に位置する。中心に向かって四段に下がる長さ1.3m、幅0.75m、深さ0.55mの楕円形土坑。出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

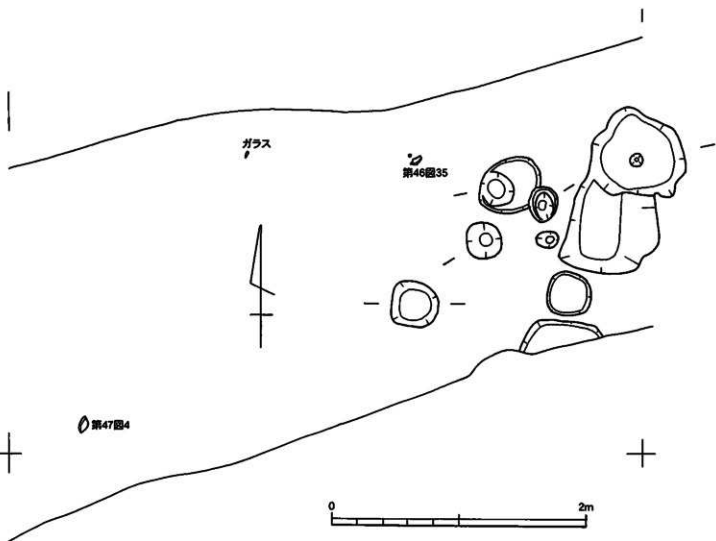
SK4出土遺物(第15図7～9) 7は備前焼播鉢で交叉罫目をもつらしく近世1b期のもの。8は鉄釘。9は土壁破片である。

SK12(第13図) 1区のSK4の東に位置する。初め焼土の分布として掘り下げたところ、土坑状になった。遺構は北部の楕円形部分と南部を一つの土坑としたが、二基の重複であるとしても前後関係は分からなかった。礎の出土状態からみて、SK12は南側の浅い大型土坑に切られている。北部の規模は長さ1.4m、幅0.7m、深さ0.13mである。SK12の時期は、出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

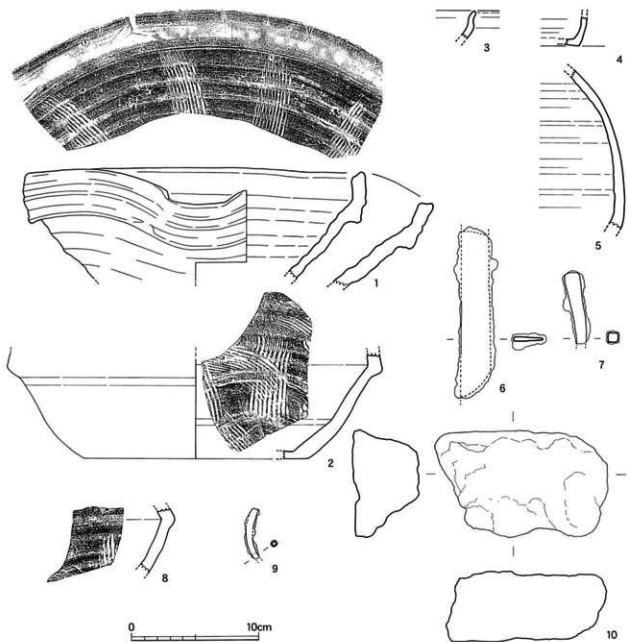
SK12出土遺物(第15図1～6・第59図1～5) 第15図1は中世6期の備前焼播鉢で、南部に下半分と外周の部を欠き掘えられたような状態で出土した。2も備前焼播鉢で交叉罫目の近世1b期(1570年代以降)。3は天目碗。4は備前焼の瓶。5は鉄製品で刃物。6は鉄釘。第59図1は中国製白磁皿。2は中国製白磁の小杯。4は弥生土器の壺。5は鉄製品。

第13図中の遺物(第46図・第47図) 第13図の遺物は出土標高4.45m～4.65mの間にある。

第14図中の遺物 第47図4は近世1b期の備前焼播鉢。第46図35は京都系土師器2～3期。



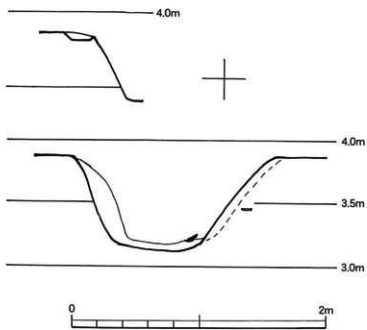
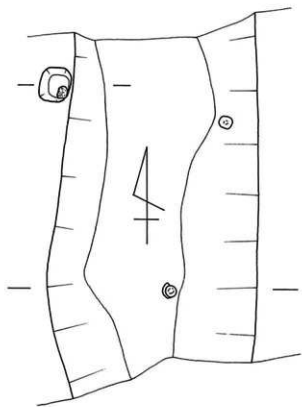
第14図 3区遺構配置図



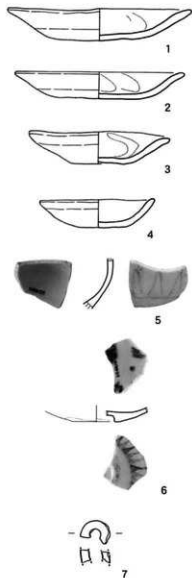
第15図 SK4・SK12出土遺物実測図

SD19 (第16図) 2区と3区の境界を南北に走る溝状遺構である。幅1.2m、深さ0.5mを計り、床面は南に向かって下がる。SD19の時期は、出土した肥前系磁器から17世紀中葉前後の遺構と判断する。

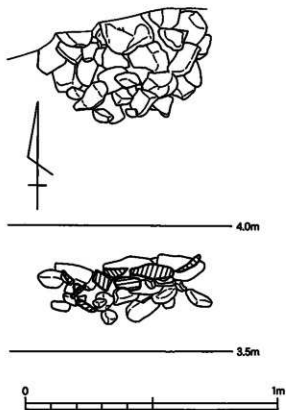
SD19出土遺物 (第17図1～6) 1～4は京都系土師器である。5は1630～1650年代の肥前系染付け甕。6は碁笥底の中国青花皿C群。



第16图 SD19实测图



第17图 SD19出土遗物实测图



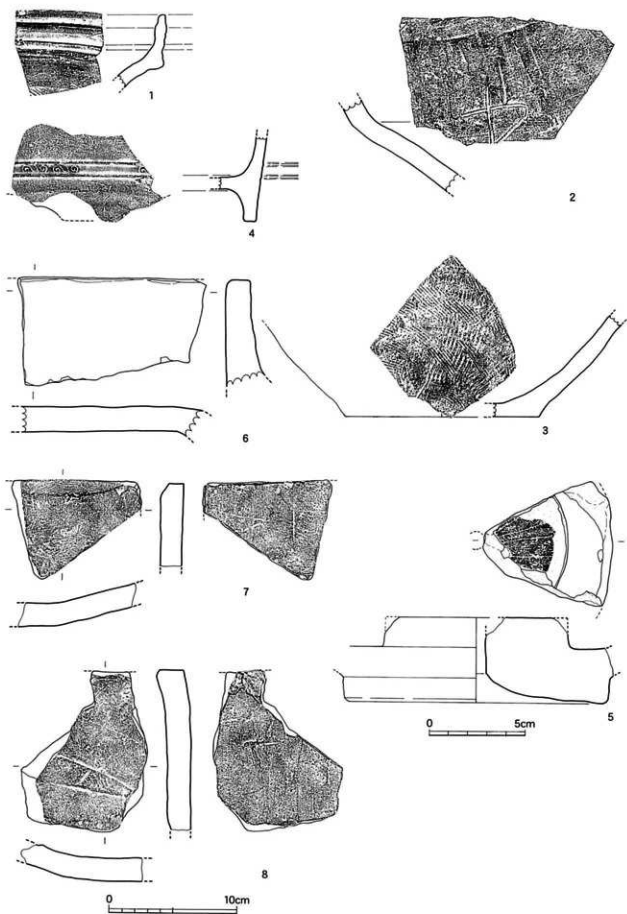
第18図 SX26実測図

SX26 (第18図) 3区の北壁に半分入り込んだ土や瓦等の幅0.7mの集積である。深さ0.3mの窪みに堆積した状態を示すので、確認できなかったが本来は土坑である。SX826の時期は、出土遺物から16世紀後葉～末葉の遺構と判断する。

SD26出土遺物 (第19図1～8) 1・3は近世1b期の備前焼播鉢。2は備前焼大甕。4は双頭麻手流雲紋の刻印のある瓦質火鉢。5は凝灰岩。6は屋根の中心、棟に使う伏間瓦。7・8は平瓦。

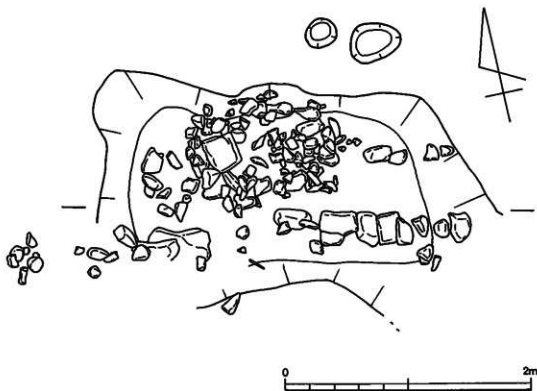
SK23 (第26図) 2区中央北部で検出した楕円形土坑で、一端は北壁に入る。長さ1.45m、幅0.55m、深さ0.2mで、床面からガラスが出土した。その他の遺物はないが、検出標高から16世紀後葉と判断する。

SK23出土遺物 (第16図7) この遺構の遺物はこの一点だけである。緑色のガラスで断面の厚さ7mm弱、細首瓶の頸部のような形状である。緑色で表面も風化していない。

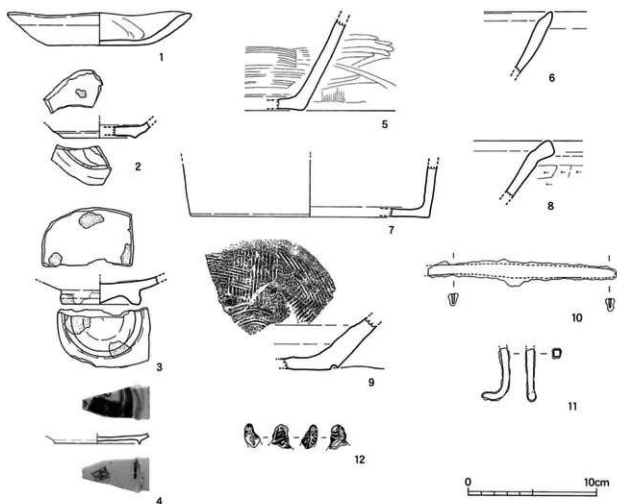


第19图 SX26出土遗物实测图

SK24 (第19図) 2区の西部に位置する隅丸長方形の土坑で断面は皿状である。長さ3.2m、幅1.8m、深さ0.5m。内部の南東部に8個内外の礎を並べた部分がある。内側の面を一直線に揃えている。内側には多数の礎が廃棄されていた。便所ではないかと想定された大友府内町第7次調査区SK141に類似する。SK24の時期は、最新の備前焼埴鉢から16世紀末葉の遺構と判断する。



第20図 SK24実測図



第21図 SK24出土遺物実測図

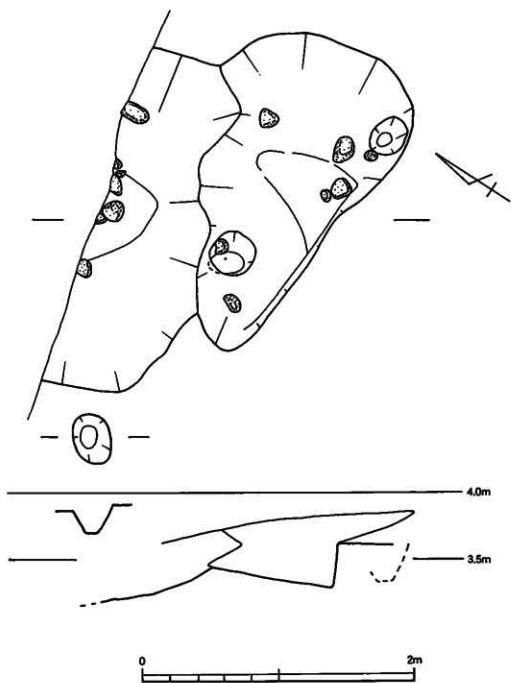
SK24出土遺物（第21図1～11） 1は完形の2期の京都系土師器である。2は瀬戸美濃陶器皿で見込みと高台接地面に各一箇所砂目積み痕がある。3は朝鮮製白磁皿で、見込みに三箇所、高台接地面に二箇所の砂目積み痕がある。4は中国龍泉窯系青花碗である。5は瓦質の鉢。6は瓦質鉢。7は瓦質火鉢。8は外面をへら削りする手の瓦質鍋。9は近世1期の備前焼播鉢。10は鉄製品で錆びているが刃物らしい。11は鉄製釘。12はラクダ形の華南三彩水滴。

SK29（第31図） 調査区東端に位置する土坑である。第5図の西向き面の層序図で示すように、標高4m付近から掘り込まれており、その意味では西側のSD19と同時期である。

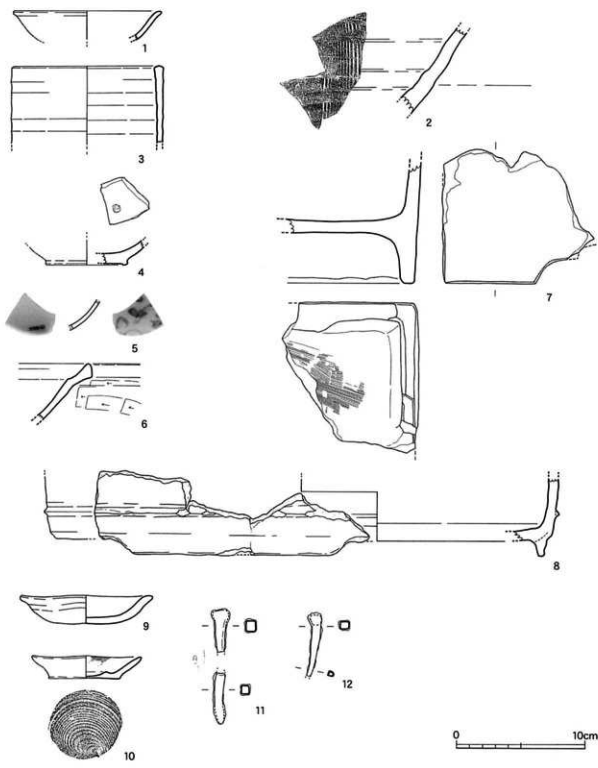
SK29出土遺物（第32図1～4） 1は3期の京都系土師器である。2は中国景德鎮窯系青花碗C群の蓮子碗。3は中国同安窯系青磁碗。4は鉄製釘。

SK31（第22図） 3区の北東部に検出した掘り鉢状の土坑である。二つの土坑が重複した形である。第4図の北壁土層図では10層に該当する。16世紀末葉の遺構と判断する。

SK31出土遺物（第23図1～12） 1は白磁皿。2は備前焼播鉢。3は備前焼水鉢。4は白磁。見込みに目跡がある。外底面は露胎。ベトナム製か。5は青花。6～8瓦質土器。6は鍋の口縁部で外面をへら削りしている。7は角火鉢。8は火鉢。9は京都系土師器皿3～4期。10は在地系土師器の灯明皿。



第22圖 SK31夷湖圖



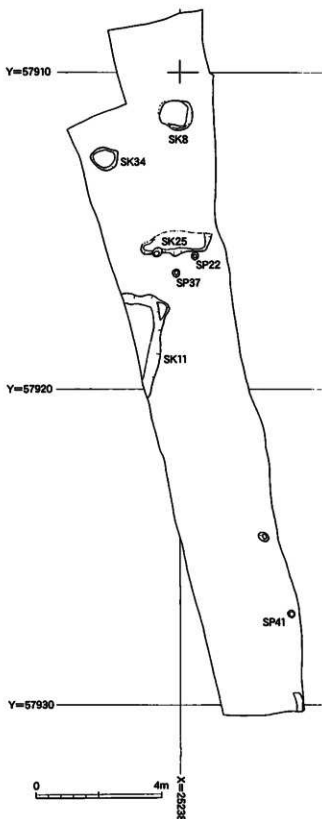
第23图 出土物实测图

③中層の遺構と遺物

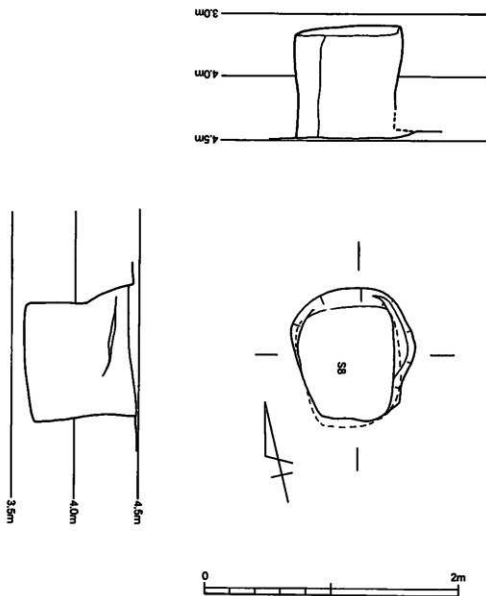
概要（第24図） 16世紀中葉から後葉。

中層として扱う遺構は上層遺構よりも明らかに下層で確認できたもの。出土遺物としては、土師器皿類の構成から在地系土師器が消えて京都系土師器単独となる段階である。調査区の北西部で検出した井戸SE38は線路脇であるため、安全性を優先し掘り下げなかった。遺構配置図では上層としたが、層序図を検討した結果、SK 8と同じ高さから掘り込んでおり、中層段階としておく。

SE38



第24図 中層遺構配置図

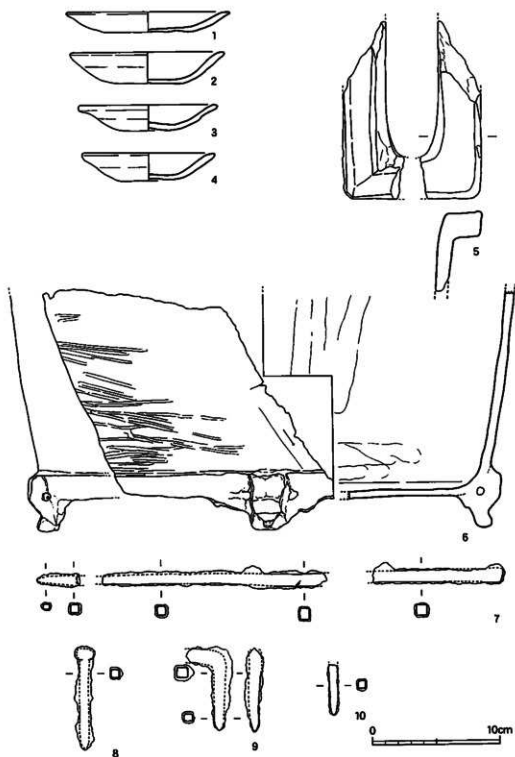


第25図 SK8実測図

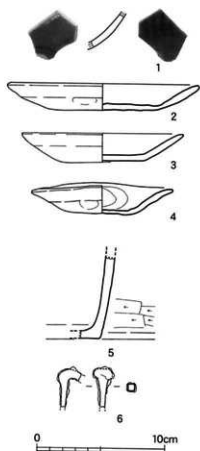
SK8 (第25図) 2区西部の標高4.5m弱で検出した長さ1.1m、幅0.78m、深さ0.9m土坑である。外形の東部が不自然なのは、遺物の出土を追って壁の外まで広げたからである。東部から東側の下層に(SK8の上部に相当する高さ)1期の京都系土師器完形品が分布していたのを誤って取り込んだ可能性がある。脚付き火鉢はSK8 から出土した。

SK8出土遺物(第26図1~10) 1~4は京都系土師器で、1は1期、他は2期。5は瓦質角火鉢。6は瓦質火鉢で、脚部には外面に紐を廻らせるよう穴があいている。7は三つに割れてるが鉄製の大型釘。8~10も鉄製釘。

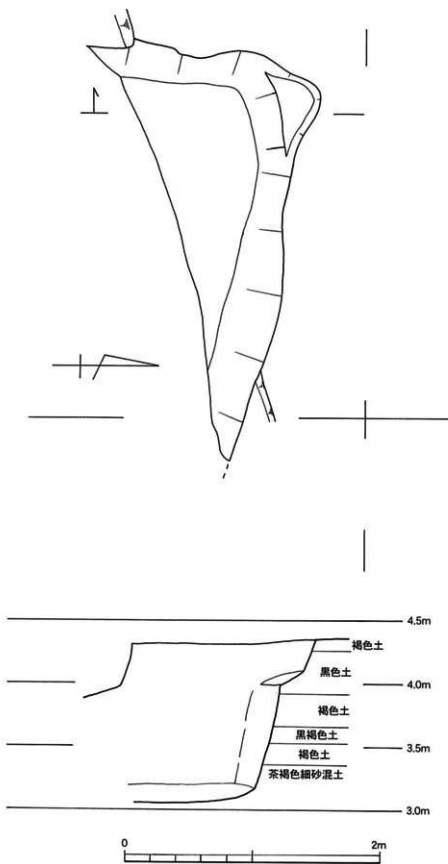
SK25出土遺物(第30図1~6) 1~4は京都系土師器皿である。1は口径16.2cm、器高2.5cm、2は口径12.4cm、器高2.3cm、3は口径10.9cm、器高2.2cm、4は口径10.2cm、器高2.4cmである。これらは口縁部の横ながで強く表れており2期の京都系土師器である。5は鉄製釘。6は瓦質鉢。口径24.6cm。



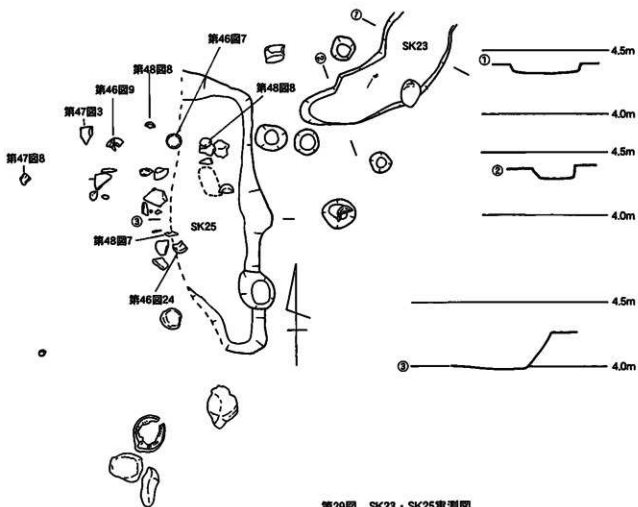
第26图 SK8出土遗物插图



第27图 SK11出土遺物

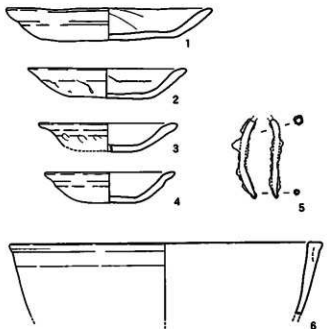


第28图 SK11実測図



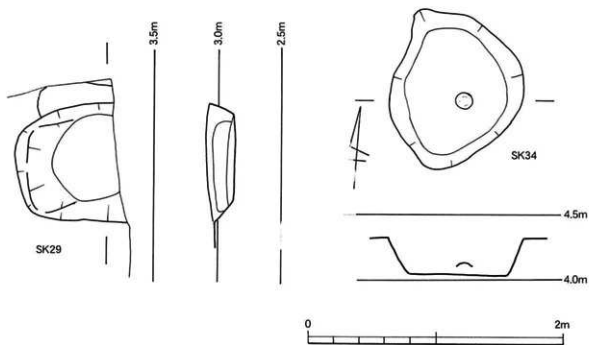
第29回 SK23・SK25実測図

SK25 (第29回)
 2区中央部に位置し、西部は大型土坑SK48に切られる。現状の規模は長さ2.2m、幅0.8m、深さ0.3mである。SK25の時期は、土師器から16世紀中葉から後葉の遺構と判断する。

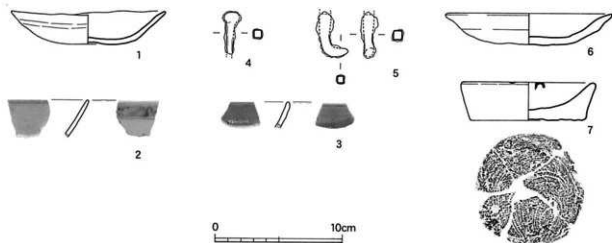


0 10cm

第30回 SK25出土遺物実測図



第31図 SK29・SK34実測図



第32図 SK29・SK30出土遺物実測図

SK34 (第13・31図) 2区の西南部にあり、SK4の南東側に位置する。第13図の断面に示すようにSK4・SK12よりも下層で検出した。

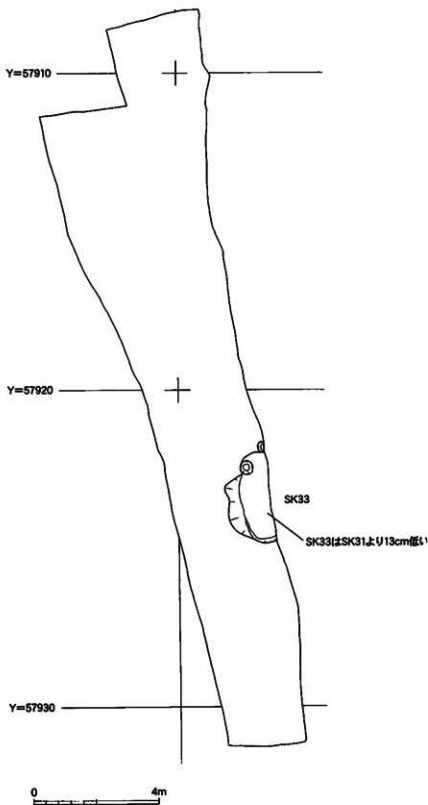
SK34出土遺物 (第32図6・7) 6は2期に比定できる京都系土師器皿である。7は在地系土師器皿である。口縁部が短く、器壁が厚い特徴をもち、大友城下町跡では類例に乏しい。SE36(第10図) 上記のように掘り込み面の高さからこの段階の遺構と考えられる。現状で幅2.4m以上あり、中央部に井戸側の部分が円い変色域として存在した。井戸側材料の抜き取り痕が認められないので、桶重ねの井戸であったと思われる。

④下層の遺構と遺物

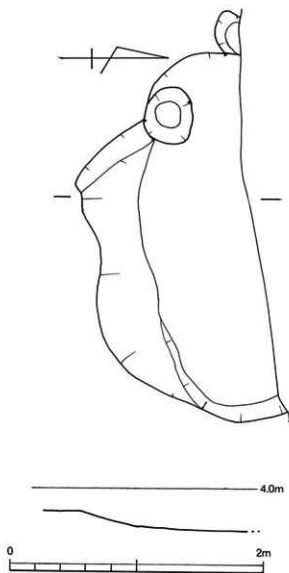
概要（第33図） 下層の遺構とするのは二基の土坑SK11とSK33だけである。SK33はSK31の下位で検出し、明らかに時期差が認められるので、分離したが、この時期の他の遺構についてはSK11以外明確にできない。SK33は19層の上にあることと、最下層の遺構としたSK41・42等が19層の下にあることから、これらを分離したが、遺物には明らかな時期差を認めない。

SK11（第28図） 2区と3区の境界に位置し、方形土坑らしいものの一部を調査した。南部は金池水路のため削られ消滅していた。検出標高は4.4m。現状で長さ3.2m、幅1.85m、深さ1.3m。16世紀前葉～中葉の遺構と判断する。

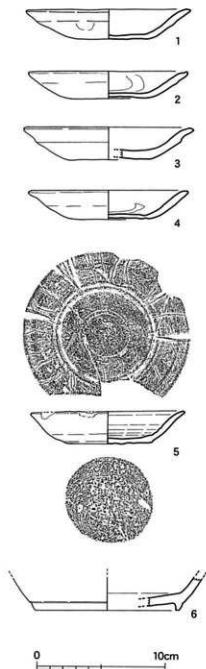
SK11出土遺物（第27図 1～6） 1は中国景徳鎮景青花碗。2～4は1期の京都系土師器皿。5は内面上部をへら削りした瓦質火鉢。6は鉄製釘。



第33図 下層遺構配置図



第34図 SK33実測図



第35図 SK33出土遺物実測図

SK33 (第34図) 3区北部に位置する浅い傾斜の落込みである。北側壁の層序では、15層・16層等の落込み部分に該当する。規模は東西3m、南北は現状で1.4m、深さ0.2mで確認したが、層序図によればもっと広がりをもつようである。出土遺物の年代からSK33の所属時期は16世紀前葉から中葉と考えられる。

SK33出土遺物 (第35図1～6) 1～4は京都系土師器1期の皿である。1は原型の2/5が残り、復元口径12.8cm、器高2.35cm、2は1/2が残り、復元口径12.4cm、器高2.45cm、3は1/2が残り、復元口径13.2cm、器高2.5cm、4は2/3が残り、復元口径12.4cm、器高2.3cmである。

5は内面にロクロ目を残し、底部を糸切り離した在地系土師器の皿である。3/4が残り、口径12.0cm、底径6.0cm、器高2.5cmである。6は古代の須恵器で、高台付き碗。底径11.2cm。

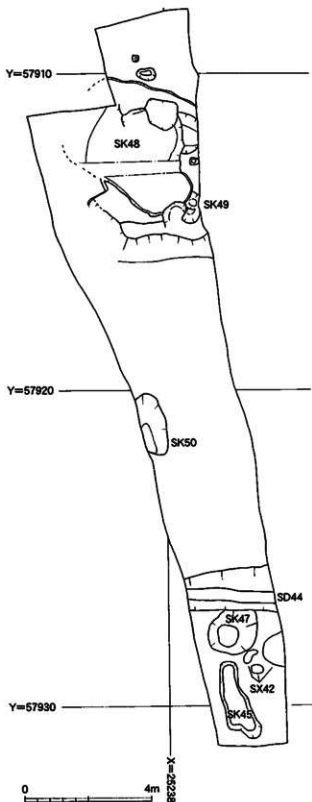
⑤最下層の遺構と遺物

概要(第30図) 調査区南側の水路に面した面を観察し、地山と認めた最下部から検出した遺構群である。2区西部で大型の土坑SK48、それに重複するSK49、3区西部にありSK24の下で検出したSK50、東部で検出した溝状遺構SD44・土坑SK45・SK47、遺物包含層SX42がある。京都系土師器1期と在地系土師器の共存から、16世紀前半から中葉に比定する。

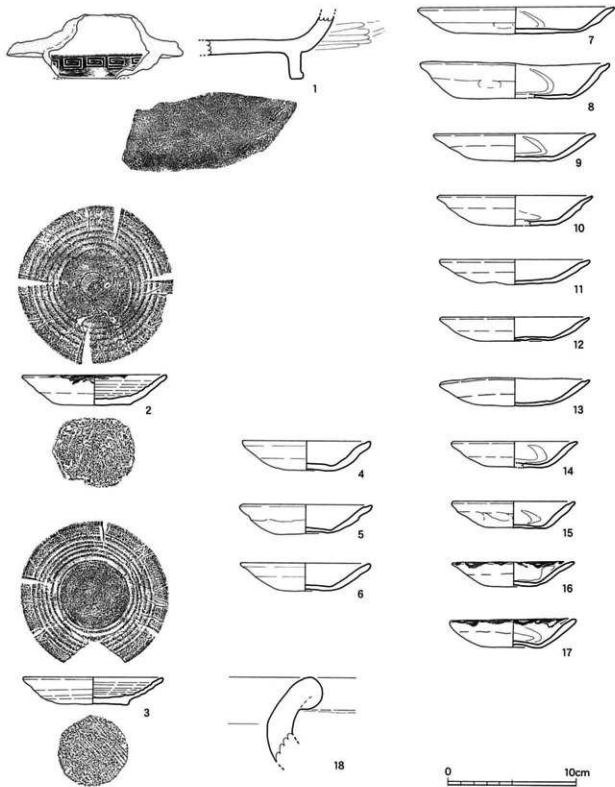
SX42(第19図) 調査区東部に位置し、層序図では1層に該当する遺物包含層である。第30図では3ヶ所に分かれた状態で図示しているが、連続的に分布していた。多量の土師器がまとめて捨てられた状態であった。

SX42出土遺物(第36図1~18) 1は脚部に雷紋の刻印がある瓦質火鉢。2・3は在地系土師器皿の完形品で3の外底面には板状圧痕が付く。4~17は京都系土師器皿で、図示したのは完形品(4~6・16)、2/3以上残存品(7・10・11・15・17)等である。16・17は口縁部の広い範囲に煤が付く灯明皿である。18は備前焼変。

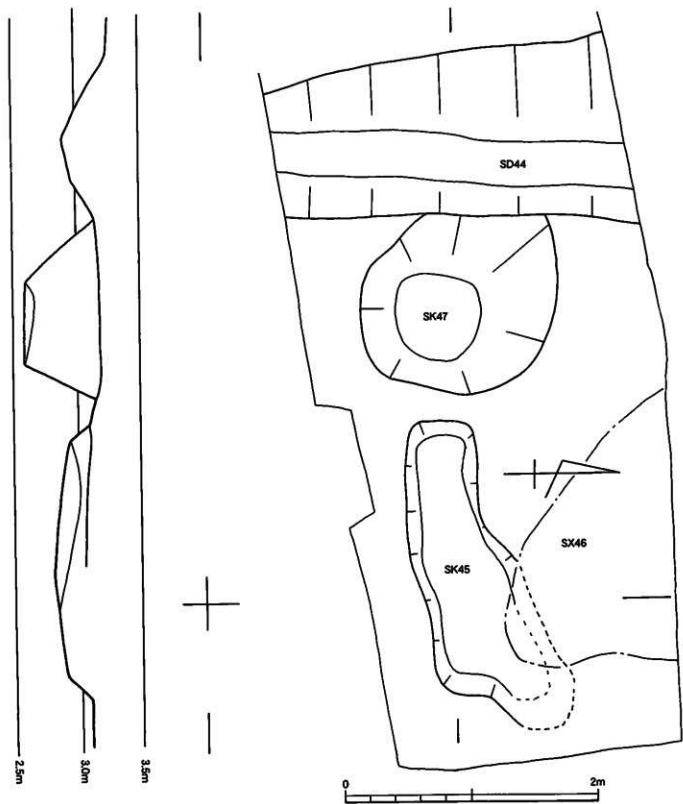
SK45(第38図) SK47の東に位置する、長さ1.8m幅0.5m強、深さ0.2mの土坑である。遺物は出土していないが、検出面が同じであり、SK47の時期である。



第36図 最下層遺構配置図



第37图 SK42出土遺物実測図



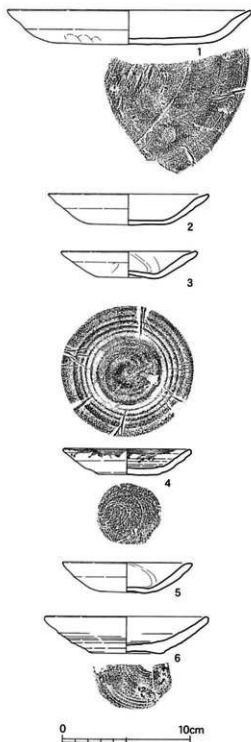
第38图 SK44・SK45・SK47实测图

SK47 (第38図) SX42と重複関係にないが、ほぼ同時に存在した遺構である。規模は1.57m×1.4m、深さは0.6mである。

SK47出土遺物 (第36図1) 5は京都系土師器1期の皿。6は在地系土師器で、内面にはロクロ目は残らない。

SX46 (第42図) SX46は東端部の斜面に廃棄された土師器類の包含層である。SK45が後から切り込んでいる。第36図のSX42とほとんど高低差はないが、SX46が上にある。

SX46出土遺物 (第43図1) 1は器壁の厚さが5mm以下で内面には接合痕があり、底部が薄く京都系土師器1期の特徴をもっている。SX46ではこの他にも、多数の破片が存在する。



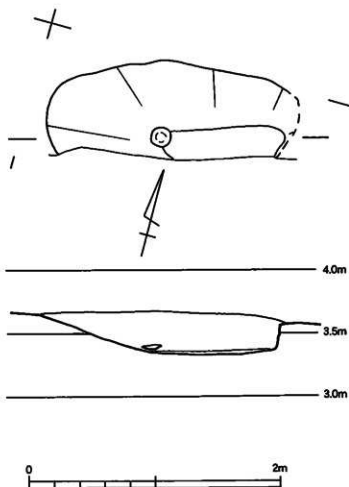
第39図 SK47出土遺物実測図

SK48 (第36・41図) 2区西部の中世地山面で検出した不正形の土坑である。中央にベルトを残したまま図化しているが、東側の段差は自然地形の斜面部が始まる位置である。南部は壁がめぐらなかつた。埋土上部に礫が十数点と瓦質土器・銭貨が出土した。

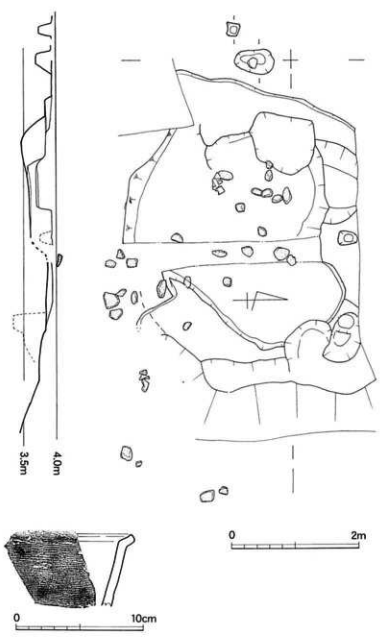
SK48出土遺物 (第41・42図) 瓦質土器は口縁部が短く外反し、内面に稜線をもつもので、器面調査は内面胴部を横方向の刷毛目、その他の部分はなでている。銭貨は「口元口口」と読める銅銭である。

SK50 (第40図) SK24調査後、下位で検出した土坑である。所属時期は16世紀前葉～中葉である。

SK50出土遺物 (第40図1) 床面から出土した京都系土師器1期の皿である。



第40図 SK50



第41図 SK48遺構及び出土遺物実測図



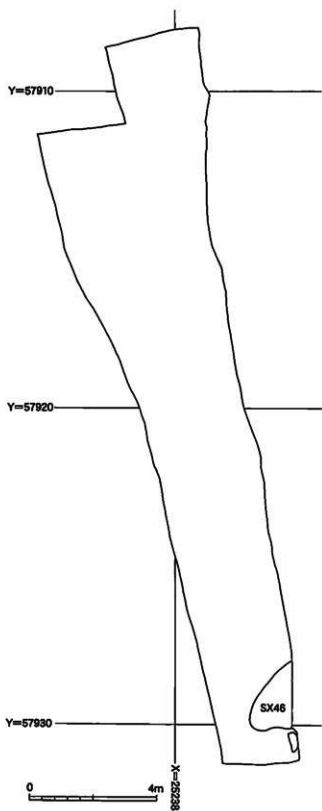
第42図 SK48出土銭投影

包含層の遺物

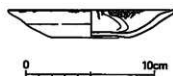
遺構以外の遺物は、平面的に位置を記録して採り上げたものと包含層それぞれで一括したものとがある。本調査区では近世以降の水田の酸化し硬化した床土を5層とする。第62図に5層上下の遺物を掲載している。第50図～58図・60図の遺物はSK11壁面の土層を基準に採り上げたため、第4図の調査区北面土層との対応関係について説明しておきたい。SK11検出面である薄い褐色土（土器片にはB層と注記）が北壁の30層上部に対応する。下層の黒色土は30層中部と下部である。黒色土下位に褐色土（C層と注記）があり、その下の黒褐色土（D・E層と注記）が北壁の43層に対応する。

第46図（1～36）

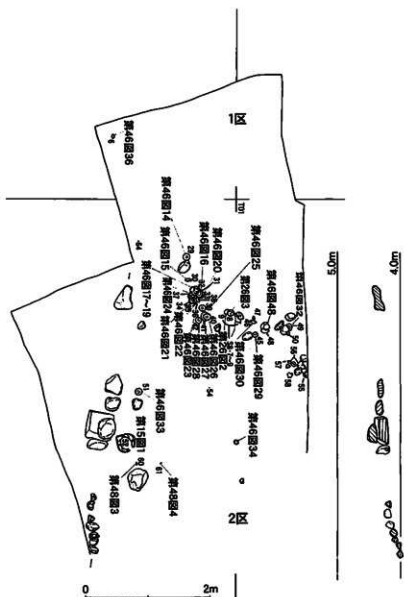
第47図（1～9） 1は中国南部製の褐釉陶器四耳壺。2は瓦質甕の口縁部。3・4は備前焼插鉢。6は浅い瓦質火鉢。7は瓦質の風炉。8は丸瓦。9は平瓦。



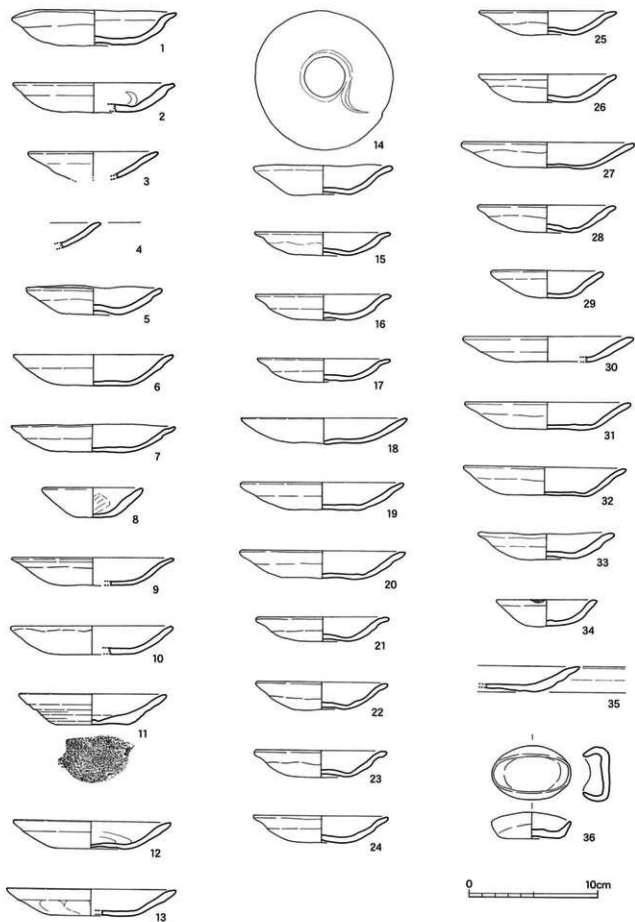
第43圖 遺構配置圖



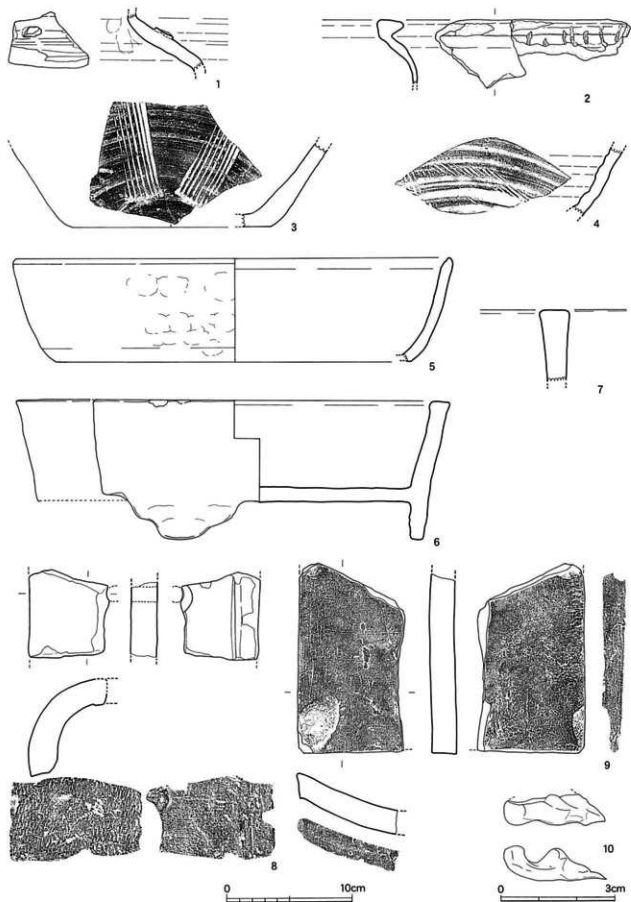
第44圖 SK46遺構実測図



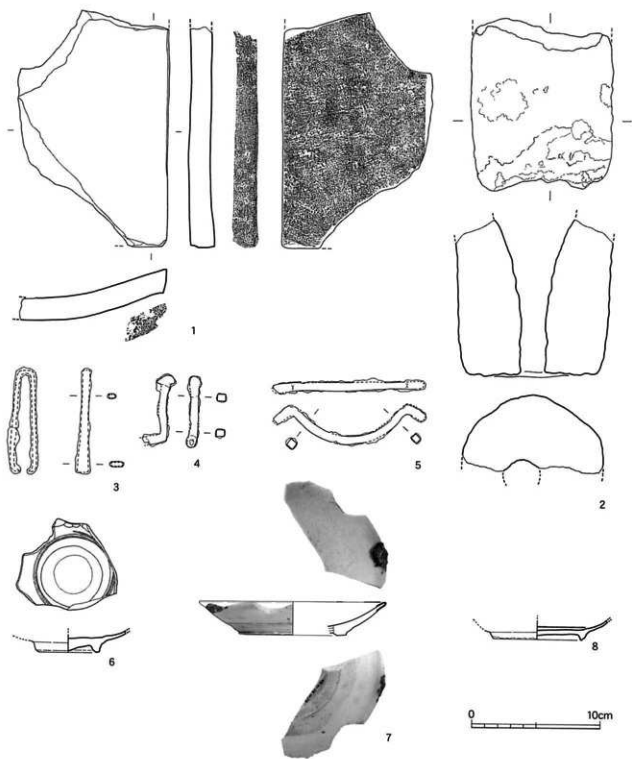
第45図 1・2区の標高4.4m前後遺物出土状況



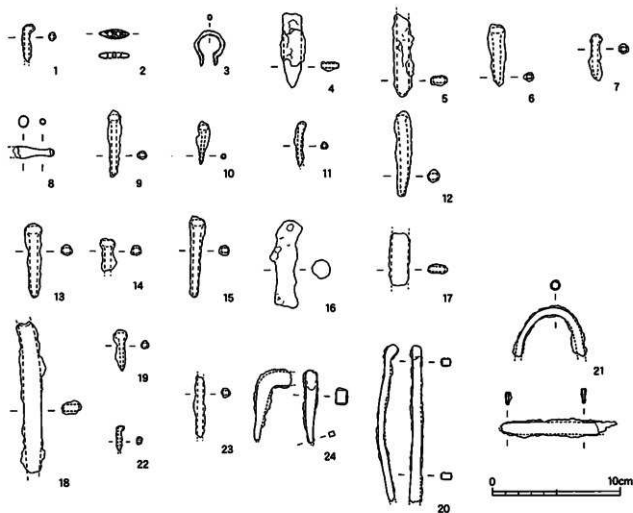
第46図 平面図にある遺物実測図



第47图 包含层出土物实测图



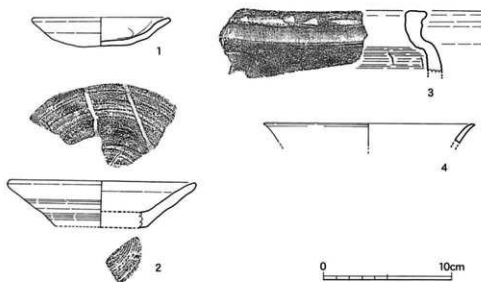
第48图 包含层出土遗物实测图



第49回 包含層出土遺物実測図

第48回 (1~8) 1は平瓦。2は凝灰岩製の羽口で送風口部分に溶けた金属が溶着している。3は鉄製毛抜きの完形品。4は鉄製釘。5は鉄製品で、箆筒等の引出しの取っ手。6は中国製青花皿で、見込みには幅13mmほどの蛇の目軸刺ぎがあり、重ね焼き痕が付く。疊付きは軸刺ぎ。7は中国製白磁皿。8は中国景德鎮窯系青花皿。見込みと高台付け根に青い線が廻る。

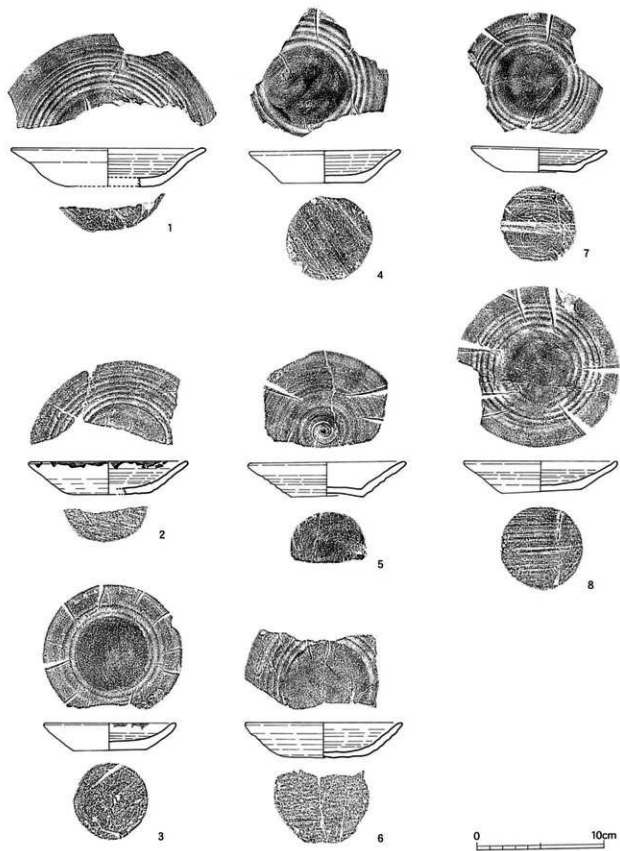
第49回 (1~25) 2は表面に金箔が付着した鏝等の組用品である。8は6層出土の煙管。



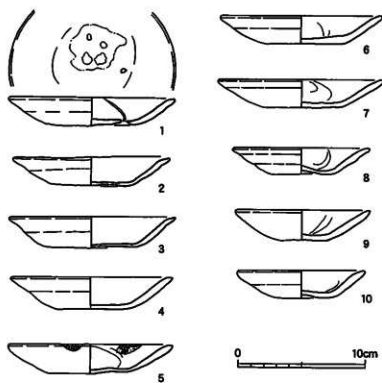
第50図 包含層出土遺物実測図

第50図（1～19） 黒色土層出土。1は京都系土師器2期の皿。2は在地系土師器皿。3は瓦質土器の甕。口縁部に列点紋があるもので、大友府内町で通有のものである。

第51図（1～25） 黒色土直下の褐色土層から出土した。すべて内面にロクロ目を残す在地系土師器皿である。2・4・6～8は外底面に板状圧痕が付く。2と3は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。

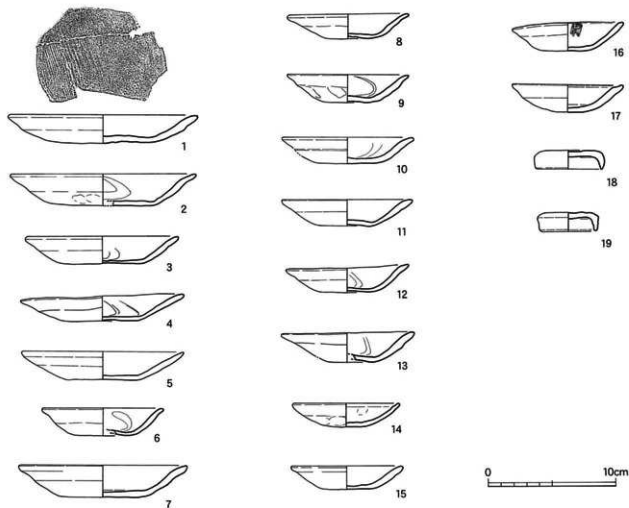


第51图 包含层出土遗物实测图



第52図 包含層出土遺物実測図

第52図（1～10） 黒色土直下の褐色土層から出土した。すべて1期の京都系土師器皿である。1は完形品で焼成後の穿孔が5個あり、中央部の4個は外側から、単独の1個は内側から突いている。2と5の口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。



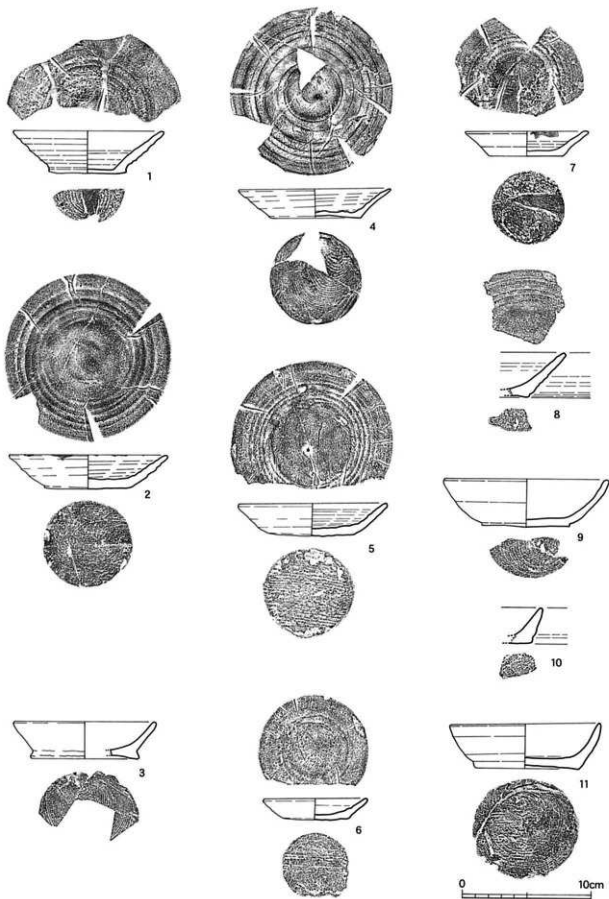
第53図 包含層出土遺物実測図

第53図(1~8) 第53図~第57図の遺物は、第51・52図の遺物が出土した褐色土層直下の黒褐色土層から出土した。第53図はすべて京都系土師器で、18・19が通称焼塩蓋である他、残りは皿・小皿である。16は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。

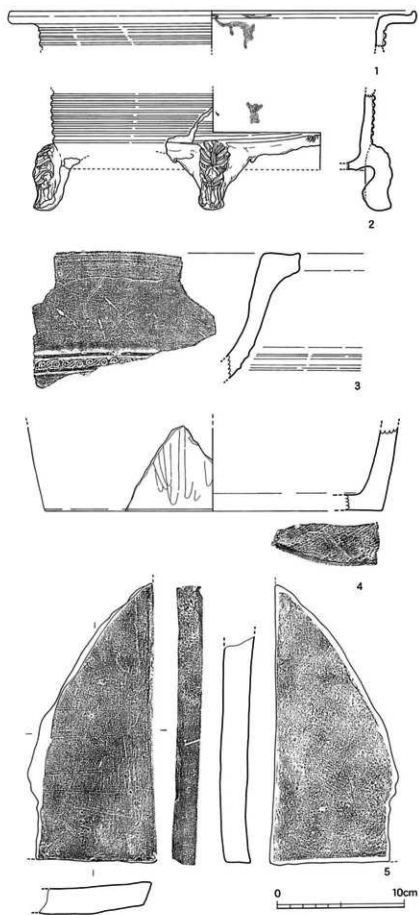
第54図(1~4) 黒褐色土層出土。すべて在地系土師器である。2・5・6・11には外底面に板状圧痕が付く。3・9・10・11には内面に段状のロクロ目が見られない。9と11は14世紀初頭から前葉のもの。7は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。

第55図(1~5) 黒褐色土層出土。1は平行条線のめぐる瓦質火鉢。2は1と同一個体と思われる器体下半部で、外面に条線をめぐらし、脚部に型押しによる龍頭紋をもつ。3は在地系火鉢で双頭蔵手流雲紋の中央に分割線をもつもの。4は瓦質火鉢。5は平瓦。

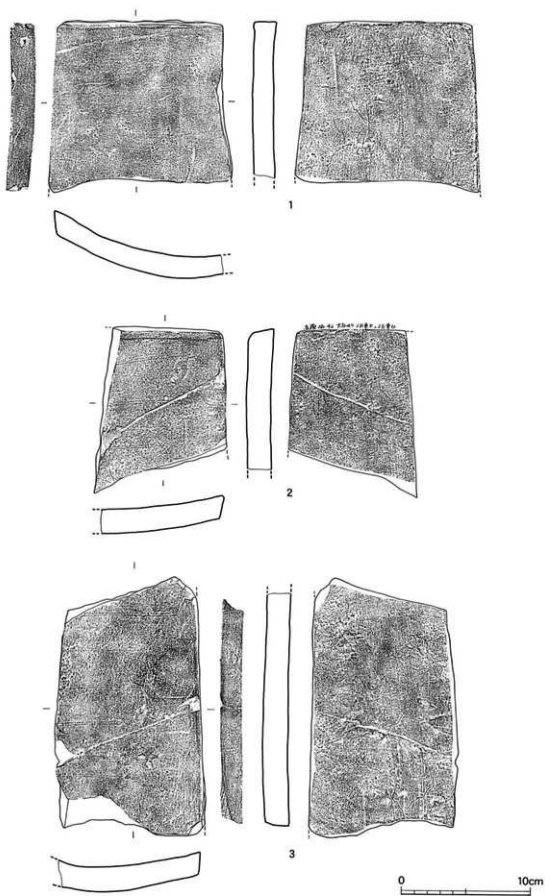
第56図(1~3) 黒褐色土層出土。すべて平瓦。



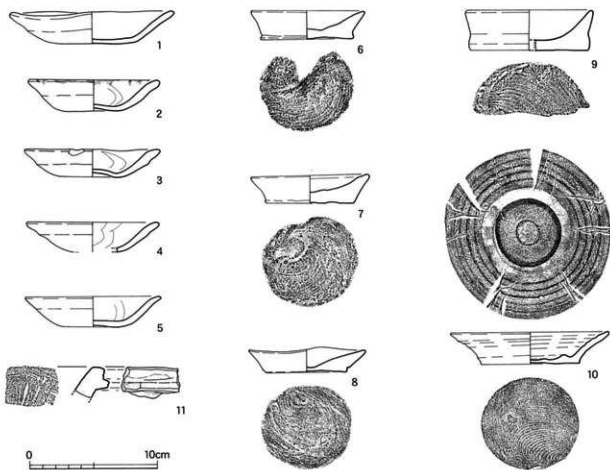
第54图 包含层出土文物素描图



第55图 包含层出土文物实测图

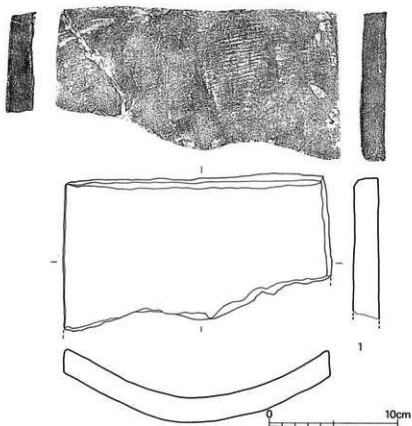


第56图 包含层出土遗物实测图



第57図 包含層出土遺物実測図

第57図（1～9） 黒褐色土層出土。1～4は1期の京都系土師器皿。5～8は見込み部分を除いて断面が三角形となる共通点をもつ。在地系土師器にほとんど類例（大友府内町跡5次調査区15世紀代のASK003で1点）がなく、他地域からの搬入品の可能性もある。9は滑石製石鍋。



第58図 包含層出土遺物実測図

第58図 (1) 黒褐色土層の下層で、地山直上から出土した。1は平瓦。

地山直上

第59図 (1~11) 1~5は焼土分布部分 (SK12) から出土した。6~11は攪乱部分出土。6は在地系土師器皿。外底面に板状圧痕が付く。7は京都系土師器。8は土師質鍋。9は瓦質火鉢。10は備前焼播鉢。11は近世陶器播鉢。

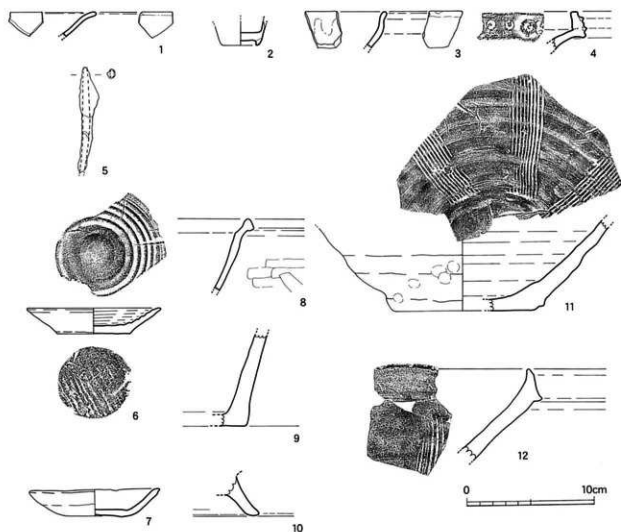
第60図 (1~19) 黒褐色土層の下層で、地山直上から出土した。1~13・15~18は京都系土師器1期。1・2・5・6の見込み部には刷毛目が残る。11には焼成前の穿孔が3個ある。14は在地系土師器。15には焼成後の穿孔がある。

二回目

第61図 (1~25) 1・2区で遺構検出した二回目の面で出土した遺物である。複数層が斜面に堆積していた3区との対応関係は把握できなかった。1~9は京都系土師器皿。1は見込みに刷毛目が残る。5・9は口縁部上端には煤が付着し灯明皿として使われている。10は在地系土師器皿。11は瓦質火鉢の脚。12は瀬戸美濃製陶器鉢。13は弥生土器。14は平瓦。15は鉄鍬。

近世以降

第62図 (1~20) 近世以降の層から出土した遺物である。5層が鉄道敷き以前の水田床土である。1~3は4層、4~8は5層、9~18は6層、19・20は7層から出土した。1は土師質鍋。2は白磁で、見込みに目跡がひとつある。3は肥前系の陶胎染付け碗で、17世紀前葉。4は瓦質播鉢。5は近世1b期の備前焼播鉢。6は備前焼壺。7は古代の須惠器高台付き碗。8は白磁皿。9は近世初頭唐津焼の碗。10は瓦質火鉢。11は青花皿。12は備前焼水屋甕。13は備前焼壺。14は須惠器甕。15は土師質の高坏脚部。16は備前焼壺。17は備前焼甕。18は中国華南製白磁皿。19は中国製青磁碗底部。20は備前焼壺。21は中国製青磁皿で明緑灰色。

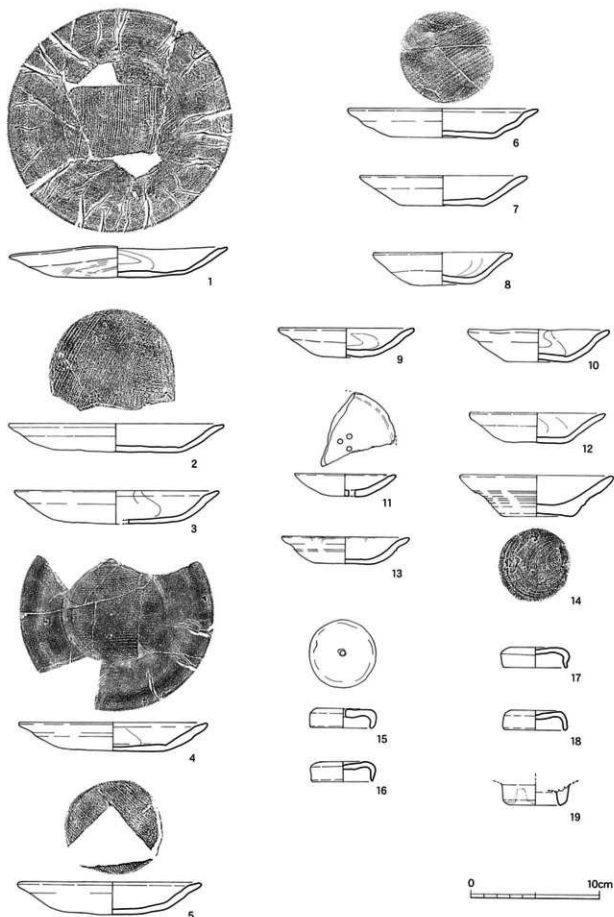


第59図 包含層出土遺物実測図

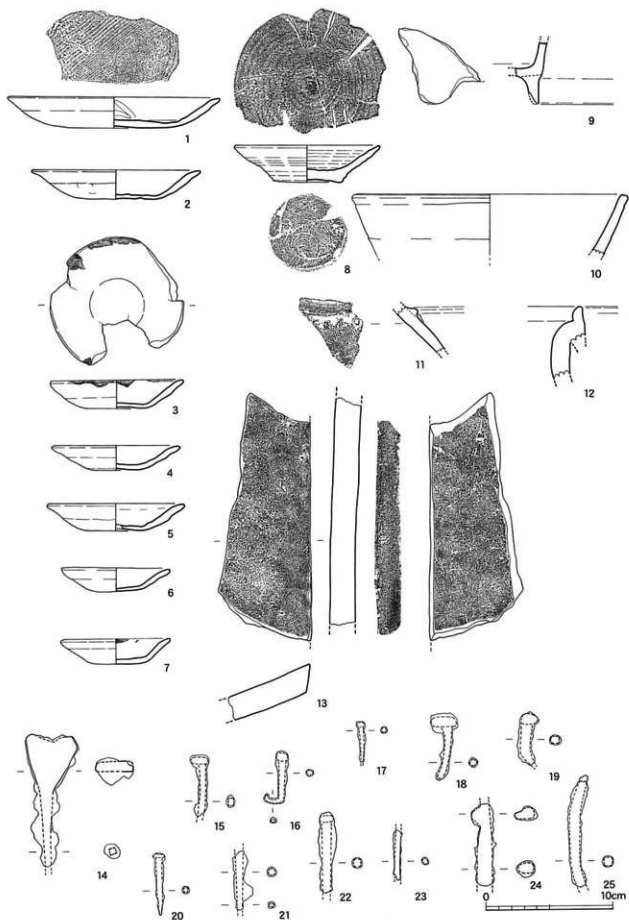
第63図（1～8） 銅製の銭貨である。1・2は銘文不明。3は北宋の元宝通宝、4は北宋の熙寧通宝、5は煙管の頭を潰し通貨として通用した雁首銭。6・7は唐の開元通宝。

第64図（1～5） 1～4は第6図の層序図中の16層から抜き取った1期の京都系土師器皿である。この16層はSK33として扱ったところであり、同一時期に廃棄された遺物である。

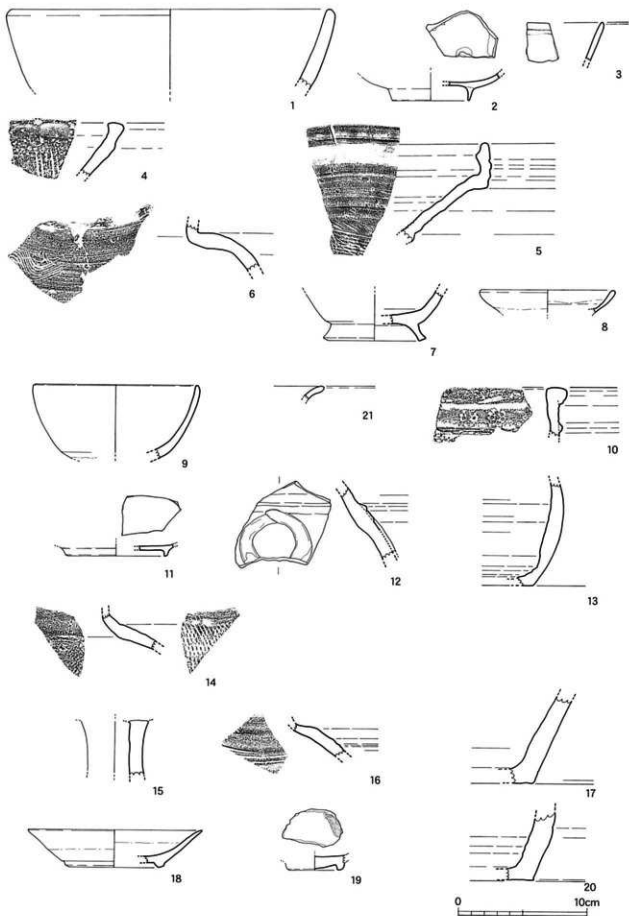
カラー写真図版の遺物（巻末1～51） 遺構外で出土した陶磁器類を説明する。1・2は表面採集。3・4は攪乱出土。5は2層。16世紀の中国龍泉窯青磁碗C3類。6～10は4層出土。11～21は5層出土。22～34は6層出土。



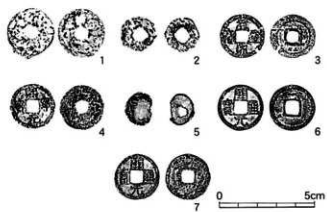
第60图 包含层出土遗物实测图



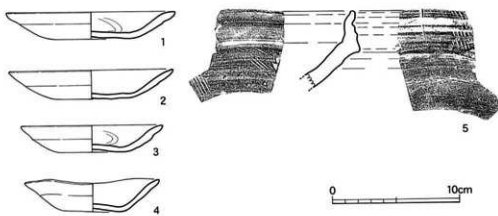
第61圖 包含層出土遺物實測圖



第62图 包含层出土遗物实测图



第63図 包含層出土遺物実測図



第64図 土層图中的遺物実測図

遺物觀察表

府内町跡40次調査遺物観察表

採出No.	器 種	生産地	法量 (単位:cm)			遺構名	備 考	
			口径	底径	高さ			
第9図1	陶器	梨押皿	中国東南	—	—	SD1		
第9図2	陶器	鉢	備前	—	—	SD1	へら記号	
第12図1	京都系土師器	皿	在 地	8.7	2.9	SK5	褐色・茶色土粒中量・二箇所焼	
第12図2	竹筒	筒	中国	—	—	SK5	薄緑	
第12図3	瓦質土器	火鉢	在 地	—	—	SK5	濃灰白色	
第12図4	鉄製品	釘	在 地	—	—	SK5		
第12図5	京都系土師器	皿	在 地	9.2	2.3	SK6	褐色・片側煤付着	
第12図6	京都系土師器	鉢	在 地	—	—	SK6		
第12図7	陶器	甕	備前	—	—	SK6	傾き不明	
第12図8	瓦	平瓦	在 地	—	—	SK7	凸面へら切り	
第12図9	鉄製品	釘	在 地	50.8 g	37.0 g	SK7		
第12図10	陶和道宝	坏	在 地	—	—	SK7	北宋1111年	
第15図1	陶器	細鉢	備前	26.3	—	SK12	最大口径31.8cm	
第15図2	陶器	細鉢	備前	—	17.6	SK12	交叉すり目	
第15図3	陶器	大百輪	瀬戸・美濃	—	—	SK12		
第15図4	陶器	鹿地刺	備前	—	—	SK12		
第15図5	陶器	蓋	備前	—	—	SK12		
第15図6	鉄製品	刃物	在 地	13.1	0.8	72.7	暗赤褐色	
第15図7	鉄製品	釘	在 地	5.8	1.0	185 g	数値は長さ・厚さ・重さの順	
第15図9	陶器	細鉢	在 地	—	—	SK1	交叉すり目	
第15図8	鉄製品	釘	在 地	—	—	SK1		
第15図10	土	吹土	在 地	13.5	5.3	8.1	SK1	
第17図1	京都系土師器	坪	在 地	14.1	2.5	SD19	灰白色	
第17図2	京都系土師器	坪	在 地	13.2	2.1	SD19	浅黄褐色	
第17図3	京都系土師器	坪	在 地	10.9	2.5	SD19	灰白色	
第17図4	京都系土師器	坪	在 地	8.8	2.1	SD19	浅黄褐色	
第17図5	染付け	苎	肥前	—	—	SD19	1630年～50年	
第17図6	青花	蘇州磁皿	中国・福建	—	—	SD19		
第17図7	ガラス	—	不明	—	—	SK23	幅2.3cm、緑色	
第19図1	陶器	細鉢	備前	—	—	SK26		
第19図2	陶器	甕	備前	—	—	SX26	へら記号	
第19図3	陶器	細鉢	備前	—	—	SX26	交叉すり目	
第19図4	瓦質土器	火鉢	在 地	—	—	SX26	褐色	
第19図5	石製品	石臼	在 地	26	9	SX26	下丁、凝灰岩	
第19図6	瓦質土器	火鉢	在 地	—	—	SX26	褐色	
第19図7	瓦	平瓦	在 地	—	—	SX26		
第19図8	瓦	平瓦	在 地	—	—	SX26		
第21図1	京都系土師器	筒	在 地	—	—	SK24		
第21図2	陶器	皿	瀬戸・美濃	—	—	SK24	両面に砂目積み痕	
第21図3	白磁	碗	朝鮮	—	—	SK24	両面に砂目積み痕	
第21図4	青花	碗	中国・福建	—	—	SK24		
第21図5	瓦質土器	鉢	在 地	—	—	SK24	灰褐色	
第21図6	瓦質土器	碗	在 地	—	—	SK24	濃黄褐色	
第21図7	瓦質土器	碗	在 地	18.3	—	SK24	明褐色	
第21図8	瓦質土器	碗	在 地	—	—	SK24	暗褐色	
第21図9	陶器	細鉢	備前	—	—	SK19+SK21+束8付	交叉すり目	
第21図10	鉄製品	釘	在 地	14.6	0.5	26.3 g	数値は長さ・厚さ・重さの順	
第21図11	鉄製品	釘	在 地	4.2	0.6	3.1 g	数値は長さ・厚さ・重さの順	
第21図12	陶器	二彩	中国・福建	—	—	SK24		
第23図1	白磁	皿	中国	11.6	—	SK31		
第23図2	陶器	細鉢	備前	—	—	SK31		
第23図3	陶器	水入	備前	11.8	—	SK31	北境No21と接合	
第23図4	白磁	碗	ベトナム	—	6.1	SK31		
第23図5	青花	碗	中国・福建	—	—	SK31	外底面磨削、見込み目跡	
第23図6	瓦質土器	鉢	備前	—	—	SK31		
第23図7	瓦質土器	角火鉢	在 地	—	—	SK31	暗褐色	
第23図8	瓦質土器	火鉢	在 地	—	—	SK31	灰黄褐色	
第23図9	瓦質土器	火鉢	在 地	—	—	SK31	暗褐色	
第23図10	京都系土師器	皿	在 地	10.1	—	2.2	SK31	褐色
第23図11	鉄製品	釘	在 地	8.6	5.5	1.8	SK31	褐色
第23図12	鉄製品	釘	在 地	3.1	0.9	7.7 g	SK31	数値は上1点の長さ・厚さ・重さの順
第26図1	京都系土師器	皿	在 地	5	0.75	5.1 g	SK31	数値は長さ・厚さ・重さの順
第26図2	京都系土師器	皿	在 地	12.8	—	—	SK8	金色泥付痕
第26図3	京都系土師器	皿	在 地	12.1	—	—	SK8	褐色・茶色土粒少量
第26図4	京都系土師器	皿	在 地	10.9	—	—	SK8	褐色
第26図5	瓦質土器	角火鉢	在 地	10.1	—	—	SK8	褐色・見込み痕状僅み残る
第26図6	瓦質土器	火鉢	在 地	35.6	—	—	SK8	S根と接合、暗褐色
第26図7	鉄製品	釘	在 地	3.3	17.8	10.3	SK8	数値は3箇の
第26図8	鉄製品	釘	在 地	8.1	1.0	23.7 g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第26図9	鉄製品	釘	在 地	6.6	1.5	21.2g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第26図10	鉄製品	釘	在 地	3.9	0.7	4.3g	SK8	数値は長さ・厚さ・重さの順
第27図1	青花	碗	中国・福建	—	—	SK11		
第27図2	京都系土師器	皿	在 地	15.0	—	2.1	SK11	淡黄色
第27図3	京都系土師器	皿	在 地	12.6	—	2.2	SK11	にぶい黄褐色
第27図4	京都系土師器	皿	在 地	11.1	—	2.5	SK11	淡黄色

府内町誌40次調査遺物観察表

種別No.	器 種	生産地	法量 (単位:cm)			遺構名	備 考		
			口径	底径	器高				
第27回5	瓦質土器	皿	在産地			SK11			
第27回6	鉄製品	釘	在産地	3.2	0.7	3.1g	SK11	数値は長さ・厚さ・重さの順	
第30回1	京系系土師器	皿	在産地	10.7		2.5	SK25	淡黄褐色	
第30回2	京系系土師器	皿	在産地	12.1		2.3	SK25	淡黄褐色	
第30回3	京系系土師器	皿	在産地	10.9		2.2	SK25	淡黄褐色	
第30回4	京系系土師器	皿	在産地	10.2		2.1	SK25	にぶい黄褐色	
第30回5	鉄製品	釘	在産地	6.1		0.5	SK25		
第30回6	瓦質土器	鉢	在産地	24.6			SK25	黄灰色	
第32回1	京系系土師器	皿	在産地	12.0		2.6	SK29	褐色	
第32回2	苜花	鏝	中国産南京				SK29		
第32回3	苜花	鏝	中国産				SK29		
第32回4	鉄製品	釘	在産地	3.3	0.7	5.9g	SK29	数値は長さ・厚さ・重さの順	
第32回5	鉄製品	釘	在産地	3.7	0.9	6.6g	SK29	数値は長さ・厚さ・重さの順	
第32回6	京系系土師器	皿	在産地	12.9		2.5	SK31	黄褐色・茶色土粒中量	
第32回7	在産系土師器	皿	在産地	10.1		0	3	SK31	褐色・茶色土粒微量
第35回1	京系系土師器	皿	在産地	12.8		2.35	SK33	淡黄褐色	
第35回2	京系系土師器	皿	在産地	12.4		2.15	SK33	淡黄褐色	
第35回3	京系系土師器	皿	在産地	13.2		2.5	SK33	黄褐色	
第35回4	京系系土師器	皿	在産地	12.1		2.3	SK33	淡黄褐色	
第35回5	在産系土師器	皿	在産地	12		6.8	2.5	SK33	灰黄褐色
第35回6	須恵器	鉢	国内産			11.2		SK33	
第37回1	瓦質土器	土鉢	在産地					SK42西	黄褐色
第37回2	在産系土師器	皿	在産地	12.1		6.1	2.55	SK42	赤褐色
第37回3	在産系土師器	皿	在産地	11.8		6	2.3	SK42	赤褐色
第37回4	京系系土師器	皿	在産地	10		2.1	SK42	黄褐色 No.1	
第37回5	京系系土師器	皿	在産地	10.4		2.4	SK42	褐色 No.2	
第37回6	京系系土師器	皿	在産地	10.2		2.2	SK42	黄褐色 No.3	
第37回7	京系系土師器	皿	在産地	10.5		2.3	SK42	黄褐色	
第37回8	京系系土師器	皿	在産地	15.8		2.7	SK42	淡黄褐色	
第37回9	京系系土師器	皿	在産地	13.6		2.3	SK42	淡黄褐色	
第37回10	京系系土師器	皿	在産地	13.1		2.5	SK42	淡黄褐色	
第37回11	京系系土師器	皿	在産地	12.6		2.2	SK42	淡黄褐色	
第37回12	京系系土師器	皿	在産地	12.5		2.0	SK42	淡黄褐色	
第37回13	京系系土師器	皿	在産地	12.6		2.1	SK42	淡黄褐色	
第37回14	京系系土師器	皿	在産地	10.5		2.2	SK42	淡黄褐色	
第37回15	京系系土師器	皿	在産地	110.1		2.2	SK42	淡黄褐色	
第37回16	京系系土師器	皿	在産地	10.3		2.1	SK42	上部広縁部に煤付着	
第37回17	京系系土師器	皿	在産地	10.7		2.3	SK42	上部全周に煤付着	
第37回18	陶器	甕	備前産					SK42西	黄褐色
第39回1	京系系土師器	皿	在産地	10.1		2.7	SK44	暗灰褐色。板状煤痕	
第39回2	京系系土師器	皿	在産地	12.5		2.5	SK44	黄褐色	
第39回3	京系系土師器	皿	在産地	10.8		2.1	SK44	淡黄褐色	
第39回4	在産系土師器	皿	在産地	10.0		4.7	2.0	SK44	全周に煤付着
第39回5	京系系土師器	皿	在産地	10.1		2.3	SK47	淡黄褐色	
第39回6	在産系土師器	皿	在産地	12.8		5.3	2.9	SK47	明褐色
第40回1	京系系土師器	皿	在産地	14.3		2.6		SK50	
第41回1	瓦質土器	鉢	在産地					SK48	灰色・内面刷毛目
第41回2	鉄製品	釘	国内産					SK48	
第41回3	鉄製品	釘	国内産					SK48	
第42回1	不明残	残	中国産	2.1		3.0g		SK48	
第44回1	京系系土師器	皿	在産地	12.0			2.3	SK46	淡黄褐色
第46回1	京系系土師器	皿	在産地	12.9		2.7	1区1		平面図中にある遺物
第46回2	京系系土師器	皿	在産地	12.7		2.3	1区3		平面図中にある遺物
第46回3	京系系土師器	皿	在産地	10.2		2.1+	1区4		平面図中にある遺物
第46回4	京系系土師器	皿	在産地				2区7		平面図中にある遺物
第46回5	京系系土師器	皿	在産地	10.6		2.3	2区8		平面図中にある遺物
第46回6	京系系土師器	皿	在産地	12.5		2.5	2区11		平面図中にある遺物
第46回7	京系系土師器	皿	在産地	12.0		2.2	2区13		平面図中にある遺物
第46回8	京系系土師器	皿	在産地	8.0		2.1	2区14		平面図中にある遺物
第46回9	京系系土師器	皿	在産地	12.8		2.2	2区15		平面図中にある遺物
第46回10	京系系土師器	皿	在産地	12.7		2.3	2区16		平面図中にある遺物
第46回11	在産系土師器	皿	在産地	11.6		5.5	2区18		明褐色
第46回12	京系系土師器	皿	在産地	12.3		2.2	2区21		淡黄褐色
第46回13	京系系土師器	皿	在産地	13.2		2.1	2区25		黄白色
第46回14	京系系土師器	皿	在産地	10.9		2.1	2区28		平面図中にある遺物
第46回15	京系系土師器	皿	在産地	10.8		1.8	2区30		平面図中にある遺物
第46回16	京系系土師器	皿	在産地	10.7		2.1	2区31		平面図中にある遺物
第46回17	京系系土師器	皿	在産地	10.5		1.9	2区32-1		平面図中にある遺物
第46回18	京系系土師器	皿	在産地	13.0		2.0	2区32-2		平面図中にある遺物
第46回19	京系系土師器	皿	在産地	12.8		2.2	2区32-3		平面図中にある遺物
第46回20	京系系土師器	皿	在産地	13.0		2.2	2区33		平面図中にある遺物
第46回21	京系系土師器	皿	在産地	10.5		2.0	2区34		平面図中にある遺物
第46回22	京系系土師器	皿	在産地	10.1		2.2	2区35		平面図中にある遺物
第46回23	京系系土師器	皿	在産地	10.1		2.1	2区36		平面図中にある遺物
第46回24	京系系土師器	皿	在産地	10.8		2.2	2区37		平面図中にある遺物

府内町跡40次調査遺物観察表

採回No.	器 種	生産地	法量 (単位:cm)			遺物名	備 考
			口径	底径	高さ		
第16回25	京都系土師器 皿	在 地	10.7		2.1	21A39	平面図中にある遺物
第16回26	京都系土師器 皿	在 地	10.6		2.2	21A10	平面図中にある遺物
第16回27	京都系土師器 皿	在 地	13.5		2.1	21A11	平面図中にある遺物
第16回28	京都系土師器 皿	在 地	10.7		2.2	21A12	平面図中にある遺物
第16回29	京都系土師器 皿	在 地	8.7		2.1	21A13	暗褐色
第16回30	京都系土師器 皿	在 地	13.2		2.0	21A16	平面図中にある遺物
第16回31	京都系土師器 皿	在 地	12.9		2.3	21A18	平面図中にある遺物
第16回32	京都系土師器 皿	在 地	12.7		2.1	21A19	褐色
第16回33	京都系土師器 皿	在 地	10.5		2.1	21A51	褐色・二箇所煤付着
第16回34	京都系土師器 皿	在 地	7.8		2.1	21A53	褐色・二箇所煤付着
第16回35	京都系土師器 皿	在 地				31C3	暗褐色
第16回38	京都系土師器 耳皿	在 地	8.1		2.0	11A6	平面図中にある遺物
第17回1	陶物陶器 内耳碗	中(河内)南藩				21A5	包含屑出土
第17回2	瓦質土器 甕	在 地					灰色
第17回3	陶器 姉鉢	瀬川				21A19	赤色
第17回4	陶器 姉鉢	瀬川				31A3	文交すり目
第17回5	瓦質土器 甕	河内				31A5	淡茶褐色・外面煤付着
第17回6	瓦質土器 鉢	在 地	31.6			21A31	暗灰色
第17回7	土師土器 水鉢	在 地	31.0	30.0	10.8	21A30	褐色・裏へう消き
第17回8	土師土器 水鉢	在 地				21A33	外面鏡目・内面布目
第17回9	瓦 瓦	平瓦				11A7	
第17回10	ガラス	不明				1.5g	溶融している
第18回1	瓦 平瓦	在 地				21A25	
第18回2	石製品 割口	河内					凝灰岩・滑盤金屈付着
第18回3	鉄製品 毛抜き	河内	7.0	0.9	14.8g		数値は長さ・幅・重さの順
第18回4	鉄製品 釘	河内	5.7	0.6	0.6g	21A61	数値は長さ・幅・重さの順
第18回5	鉄製品 把手	河内	12.0	0.7	18.7g	21A63	数値は長さ・幅・重さの順
第18回6	土花	中(河内)州堂	5.1			21A9	蛇の目織刺子・赤右織き
第18回7							
第18回8	土花	中(河内)州堂			6.8	21A1	
第19回1	鉄製品 釘	在 地	8.1	0.93	23.7g	SKR	数値は長さ・幅・重さの順
第19回2	銅製品 二はぜ	河内	2.1	0.5	1.8g	5例	表面に金付着
第19回3	銅製品	不明			2.0g	5例	
第19回4	鉄製品 不明	河内	8.0	0.9	23.2g	1・2A・2面	数値は長さ・幅・重さの順
第19回5	鉄製品 釘	河内	1.9	1.0	6.8g	1・2A・2面	数値は長さ・幅・重さの順
第19回6	鉄製品 釘	河内	6.1	0.9	13.6g	1・2A・2面	数値は長さ・幅・重さの順
第19回7	鉄製品 釘	河内	5.0	0.6	3.8g	1・2A・2面	数値は長さ・幅・重さの順
第19回8	鉄製品 燗代	河内	3.2	0.9	1.1g	東部7例	数値は長さ・幅・重さの順
第19回9	鉄製品 釘	河内	4.1	0.6	3.2g	1・2A・2面	数値は長さ・幅・重さの順
第19回10	鉄製品 釘	河内	3.1	0.6	1.7g	1・2A・2面	数値は長さ・幅・重さの順
第19回11	鉄製品 釘	河内	3.3	0.5	2.1g	東部7例	数値は長さ・幅・重さの順
第19回12	鉄製品 釘	河内	6.3	1.0	15.5g	東部7例	数値は長さ・幅・重さの順
第19回13	鉄製品 釘	河内	5.6	0.8	8.6g	中央型上層	数値は長さ・幅・重さの順
第19回14	鉄製品 釘	河内	2.1	0.8	3.9g	中央型上層	数値は長さ・幅・重さの順
第19回15	鉄製品 釘	河内	6.1	0.7	11g	中央型上層	数値は長さ・幅・重さの順
第19回16	鉄製品 不明	河内	6.8	1.1	32g	中央型上層	数値は長さ・幅・重さの順
第19回17	鉄製品 小柄	河内	4.1	0.6	8.0g	中央型上層	数値は長さ・幅・重さの順
第19回18	鉄製品 小柄	河内	11.8	0.5	32g	中央型上層	数値は長さ・幅・重さの順
第19回19	鉄製品 釘	河内	3.0	0.6	2.3g	31C黒色上下位	数値は長さ・幅・重さの順
第19回20	鉄製品 不明	河内	12.3	0.5	10.8g	21CD	数値は長さ・幅・重さの順
第19回21	鉄製品 不明	河内	1.0	0.6	10g	21CD	数値は長さ・幅・重さの順
第19回22	鉄製品 不明	河内	1.9	5.5	1.0g	31C東D	数値は長さ・幅・重さの順
第19回23	鉄製品 不明	河内	4.8	0.8	4.0g	31C東D	数値は長さ・幅・重さの順
第19回24	鉄製品 不明	河内					
第19回25	鉄製品 刀子	河内	8.1	0.3	10.1g	31C西黒色上下位	31C西黒色上下位の黒褐色土
第20回1	京都系土師器 皿	在 地	10.8		2.7	21A	灰白色。黒色上下の黒褐色土
第20回2	在 地系土師器 皿	在 地	14.7	7.1	3.6	21A	褐色
第20回3	白磁 鉢	在 地				21A	灰色
第20回4	白磁 鉢	中(河内)州堂	16.1			21A	灰白色
第21回1	在 地系土師器 皿	在 地	15.3	6.6	3.1	31C黒色上下位	淡褐色。割下層
第21回2	在 地系土師器 皿	在 地	12.1	6.7	2.1	31C黒色上下位	黒付着。淡褐色。割下層
第21回3	在 地系土師器 皿	在 地	10.3	5.9	2.1	31C黒色上下位	黒付着。褐色。割下層
第21回4	在 地系土師器 皿	在 地	12.7		2.5	31C黒色上下位	褐色。割下層
第21回5	在 地系土師器 皿	在 地	12.0	5.8	2.6	31C黒色上下位	に灰・硝子
第21回6	在 地系土師器 皿	在 地	12.1	7	2	31C黒色上下位	赤褐色。割下層
第21回7	在 地系土師器 皿	在 地	10.7	5.7	1.8	31C黒色上下位	に灰・硝子。割下層
第21回8	在 地系土師器 皿	在 地	12.1	6.2	2.1	31C黒色上下位	割下層。褐色。31C黒色上下位
第22回1	京都系土師器 皿	在 地	13.0		2.1	31C黒色上下位	淡黄色。地味後穿孔5
第22回2	京都系土師器 皿	在 地	12.5		2.2	31C黒色上下位	淡黄色。黒付着
第22回3	京都系土師器 皿	在 地					
第22回4	京都系土師器 皿	在 地					
第22回5	京都系土師器 皿	在 地			2.3	31C黒色上下位	煤付着。灰白色
第22回6	京都系土師器 皿	在 地	12.0		2.1	31C黒色上下位	灰白色
第22回7	京都系土師器 皿	在 地	13.0		2.2	31C黒色上下位	灰白色
第22回8	京都系土師器 皿	在 地	10.7		2.0	31C黒色上下位	灰白色

府内町跡40次調査遺物観察表

種目No.	器 種	生産地	法量 (単位cm)			遺構名	備 考
			口径	底径	器高		
第00図11	京部系土師器	甕	在池	8.0	1.8	2区中央F	焼成前穿孔3あり・濃褐色
第00図12	京部系土師器	甕	在池	10.6	2.3	2区中央F	灰白色
第00図13	京部系土師器	甕	在池	10.0	2.1	2区中央F	煤・にぶい濃褐色
第00図14	京部系土師器	甕	在池	12.0	5.8	3区東F	褐色
第00図15	京部系土師器	焼埴器蓋	在池	5.0	1.5		焼成後穿孔1あり
第00図16	京部系土師器	焼埴器蓋	在池	3.2	1.6	2区中央F	濃茶褐色
第00図17	京部系土師器	焼埴器蓋	在池	3.3	1.6	1-2区西F	濃褐色
第00図18	京部系土師器	焼埴器蓋	在池	5.0	1.5	1-2区西F	濃褐色
第00図19	丹波	甕	中国龍泉窯	10.6	2.1	3区地山直上	
第01図1	京部系土師器	甕	在池			1-2区	見込み刷毛状などで、濃褐色
第01図2	京部系土師器	甕	在池				
第01図3	京部系土師器	甕	在池				
第01図4	京部系土師器	甕	在池				
第01図5	京部系土師器	甕	在池	10.1		2-2	1区二面43m
第01図6	京部系土師器	甕	在池	10.0	1.95	1-2区二面	濃褐色、煤付着
第01図7	京部系土師器	甕	在池	10.9	2.1	1区二面	濃褐色
第01図8	在池系土師器	甕	在池	11.6	5.8	2-2	2区二面
第01図9	瓦質土器	火鉢	在池			1区二面	地山直上43m
第01図10	陶器	鉢	瀬戸美濃	21.6		1-2区二面	
第01図11	養生土器	甕	在池			1-2区二面	茶褐色
第01図12	陶器	甕	常滑			2区二面	
第01図13	瓦	平瓦	在池			1区二面	地山直上
第01図14	鉄製品	鎌	国内	10.3	61.7g	1区二面	地山直上43m
第01図15	鉄製品	釘	国内	4.9	1.0	1-2区二面	
第01図16	鉄製品	釘	国内	4.1	0.6	1-2区二面	
第01図17	鉄製品	釘	国内	3.1	0.6	1-2区二面	
第01図18	鉄製品	釘	国内	5.2	0.6	10.4g	1-2区二面
第01図19	鉄製品	釘	国内	1.2	0.3	7.3g	1-2区二面
第01図20	鉄製品	釘	国内	5.0	0.6	3.8g	1-2区二面
第01図21	鉄製品	釘?	国内	4.6	0.5	7.0g	1区二面
第01図22	鉄製品	釘	国内	6.1	0.9	13.6g	1-2区二面
第01図23	鉄製品	釘	国内	1.0	0.6	2.1g	1区二面
第01図24	鉄製品	釘	国内	6.5	1.1	17.4g	1区二面
第01図25	鉄製品	不明	国内	8.9	0.3	23.2g	1区二面
第02図1	土師質土器	甕	国内	25.8		4樹	にぶい褐色
第02図2	白磁	甕	中国		5.9	4樹	
第02図3	陶胎込付	甕	国内			4樹	
第02図4	瓦質土器	踏鉢	国内			西5樹	濃灰白色
第02図5	陶器	踏鉢	備前			西5樹	交叉すり目
第02図6	陶器	甕	備前			中央5樹+東5樹	
第02図7	須恵焼	高台付甕	国内		8.2	東3樹	
第02図8	白磁	甕	中国	10.5		西5樹	
第02図9	陶器	甕	唐津	12.9		東6樹	外面下部2mm無釉
第02図10	瓦質土器	火鉢	国内			東6樹	濃茶褐色、梅花紋
第02図11	青花	甕	中国龍泉窯			東6樹	
第02図12	陶器	甕	備前			中央6樹	
第02図13	陶器	甕	備前			中央6樹	明赤褐色
第02図14	陶器	甕	国内			中央6樹	外面叩き・内面同心円紋
第02図15	土師質土器	高杯	国内			東6樹	褐色
第02図16	陶器	甕	備前			東6樹	
第02図17	陶器	甕	備前			西6樹	濃褐色
第02図18	白磁	甕	中国龍泉窯	13.6	6.3	西6樹	口縁上部内外輪
第02図19	白磁	甕	中国		4.0	西6樹	口縁60+東7樹
第02図20	陶器	甕	備前			東7樹	灰褐色
第02図21	白磁	甕	中国			中央6樹	明緑褐色
第03図1	不明			2.1	2.1g	2区-4	
第03図2	不明			1.8	1.1g	2区黒色土	
第03図3	元寇通宝	1078	北宋	2.1	1.8g	2区-1	
第03図4	元寇通宝	1068	北宋	2.1	2.8g	2区黒色土層	
第03図5	鎌首銭		近世	1.8	1.1g	4樹	
第03図6	元寇通宝	821	唐	2.1	1.9g	4樹	
第03図7	元寇通宝	821	唐	2.1	2.8g	SK7	
第03図8	不明銭			2.3	1.4g	SK 18	
第04図1	京部系土師器	甕	在池	13.2		2.1	北壁16
第04図2	京部系土師器	甕	在池	12.8		2.1	北壁16
第04図3	京部系土師器	甕	在池	11.1		2.1	北壁16
第04図4	京部系土師器	甕	在池	10.6		2.6	北壁16
第04図5	陶器	踏鉢	備前			北壁No.2	交叉すり目、外面にもすり目
表末カラ-1	青花	甕	中国龍泉窯			表面様果	
表末カラ-2	白磁	甕	中国			表面様果	
表末カラ-3	陶器	甕	内野山窯			龍丸	1600~1650年代
表末カラ-4	青花	甕	中国龍泉窯			龍丸	
表末カラ-5	青花	甕	中国龍泉窯			2樹	
表末カラ-6	染付	甕	肥前			4樹	
表末カラ-7	青花	甕	肥前			4樹	

種号No.	器 種	生産地	法尺 (単位cm)			遺構名	備 考
			口径	底径	器高		
漢末カラ-8	苜花	陶	中国景徳鎮窯			4 呎	
漢末カラ-9	苜花	瓦	中国景徳鎮窯			4 呎	
漢末カラ-10	苜罐	陶	中国龍泉窯			4 呎	
漢末カラ-11	苜花	陶	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-12	苜花	瓦	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-13	苜花	瓦	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-14	苜花	陶	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-15	苜花	陶	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-16	苜花	陶	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-17	苜花	陶	中国龍泉窯			5 呎	
漢末カラ-18	苜花	陶	中国景徳鎮窯			5 呎	
漢末カラ-19	苜花	青	中国龍泉窯			5 呎	
漢末カラ-20	扁脚陶盤	青	中国			5 呎	21と同一個体
漢末カラ-21	扁脚陶盤	青	中国			5 呎	
漢末カラ-22	苜花	陶	中国景徳鎮窯			6 呎	
漢末カラ-23	苜花	瓦	中国龍泉窯			6 呎	被鉢
漢末カラ-24	苜花	陶	中国景徳鎮窯			6 呎	
漢末カラ-25	苜花	陶	中国龍泉窯			6 呎	
漢末カラ-26	苜花	陶	中国龍泉窯			5 呎	
漢末カラ-27	苜花	陶	中国龍泉窯			6 呎	
漢末カラ-28	苜花	陶	中国龍泉窯			6 呎	
漢末カラ-29	苜罐	陶	中国龍泉窯			6 呎	
漢末カラ-30	苜花	陶	中国景徳鎮窯			6 呎	
漢末カラ-31	苜花	陶	中国景徳鎮窯			6 呎	
漢末カラ-32	苜花	陶	中国景徳鎮窯			6 呎	
漢末カラ-33	苜花	陶	中国景徳鎮窯			6 呎	
漢末カラ-34	陶盤	青	中国龍泉窯			6 呎	
漢末カラ-35	苜花	陶	中国景徳鎮窯			第二輪出面	
漢末カラ-36	陶盤	青	中国景徳鎮窯			3 区包含層	
漢末カラ-37	苜花	瓦	中国龍泉窯			3 区包含層	
漢末カラ-38	苜罐	瓦	中国龍泉窯			3 区包含層	
漢末カラ-39	苜花	瓦	中国龍泉窯			2 区包含層	
漢末カラ-40	苜花	瓦	中国龍泉窯			4 呎	
漢末カラ-41	苜花	陶	中国龍泉窯			西中央横土	
漢末カラ-42	苜花	陶	中国龍泉窯			黒色土上位	
漢末カラ-43	苜罐	陶	中国龍泉窯			黒色土上位	
漢末カラ-44	苜花	瓦	中国龍泉窯			黒色土上位	
漢末カラ-45	瓦影	陶	中国景徳鎮窯			黒色土上位	
漢末カラ-46	苜花	瓦	中国景徳鎮窯			黒色土上位	
漢末カラ-47	苜花	青	中国景徳鎮窯			黒色土直下	
漢末カラ-48	苜花	動物	中国景徳鎮窯			黒褐色土	
漢末カラ-49	苜罐	陶	中国景徳鎮窯			黒褐色土	
漢末カラ-50	苜花	瓦	中国景徳鎮窯			1・2区堆山	
漢末カラ-51	陶盤	青	中国龍泉窯			1・2区堆山	

第3章 まとめ

特徴 中世大友府内町跡第40次調査区の特徴は、土師器皿の出土量が他の器種に比べて多いことである。地形は東側に向かう斜面となっており、そこに廃棄を繰り返した状況であった。「大分市史」提示の「戦国時代の府内復元想定図」では、大友氏館跡の東側を通る第2南北街路の東側にあたる。国道10号拡幅工事に伴う本調査区北側の府内町跡第9次調査区と南側の第13次調査区は「御内町」に比定されており、両者に挟まれた本調査区も「御内町」に該当すると思われる。

調査の結果、検出した遺構は14世紀代の大型土坑が一基あった他はすべて16世紀前葉以降に始まる遺構であり、遺物も例外的破片以外は同様であった。小範囲の調査であったが、大友城下町の時間的展開について重要な資料になると考える。以下では、遺構の変遷について数段階に分けて述べる。

1. 斜面の埋没について

14世紀 14世紀前葉の遺構は中世の地山で検出したSK48である。内部からは礫が少量と瓦質土器片1点が出土しただけで、ゴミ穴とも考えられない。1点だけ出土した瓦質土器は山本分類の鍋B1類(山本哲也2007)にあたり、14世紀中頃とみられるが、遺構の時期を示すとは断言できない。標高約4mの地山はこの場所から東は斜面に移行(標高3m弱)するので、平坦面の末端を利用したものと思われる。西部が平坦面で東部が一段低いという状況は、第40次調査区の北側調査区である第12次・18次・28次調査区でも確認され、形成原因について16世紀第3四半期の人為的な掘削と考えられている。埋め土の層下層から京都系土師器2期の遺物や漳州窯製品が出土すること、16世紀第3四半期に建設されたと想定される街路を避けて分布すること等の理由である(坂本嘉弘2006)。

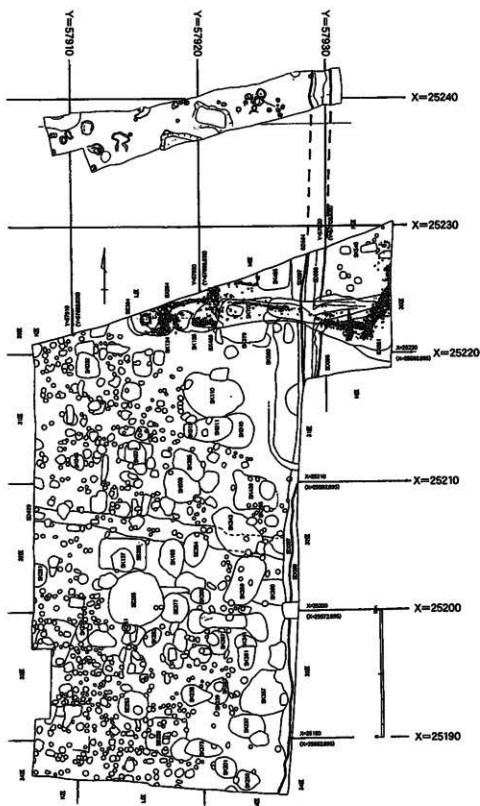
本調査区の低地部は、16世紀前葉～中葉に比定される(京都系土師器1期に在地系の内面にロクロ目を残す土師器が共存する)段階から16世紀末葉までの長期にわたり、遺物やゴミの廃棄等によって次第に標高を高めている。前記の諸調査区のように人為的に一気に整地した状況は認められない。本調査区に近い北側の第9次調査区(「豊後府内4」2006)でも東半分には標高4mから3m弱まで下がる斜面が認められるので、自然地形の連続が第40次調査区から続いていたようである。

2. 町割りについて

御内町 調査区が狭小で、遺構の配列方向は明らかに出来なかった。線路の北側では府内町跡第9次調査区Ⅰ・Ⅱ区において、府内古園にある館の東側を東西に走る「御所小路」に比定される中世の道路跡等が検出され、第9次調査区の位置は「御内町」に想定されている。また、南側では第13次調査が行われ、字図の境界と一致する南北方向の溝を確認した。検出した町屋の方向性から西側を南北に走る第2南北街路を意識した構成と捉え、南側の「堀之口町」ではなく、ここも「御内町」に想定している。第40次調査区では近世のSD1や、この東部で重複し幅の狭いSD19を検出した。SD19は出土した肥前系磁器から17世紀中頃と推定した。南側の第13次調査区では南北方向の溝SD097・SD098があり、SD097は古くとも16世紀後葉～末葉以降に掘られたと考えられている。位置・方向・年代等からこれらは同一の溝状遺構とみられ、第13次調査の報告書によれば、明治20年前後に作成された字図の区画に一致する。南北両側の調査区が御内町と想定されること、南側調査区と一体の溝状遺構が存在すること等から、第40次調査区の場所も中世の「御内町」に該当するようである。斜面上土師器類の多量廃棄が行われたのは、大友氏館周辺で宴会・儀式等を行ったことを反映するとみられる。

(参考・引用文献)

- 山本哲也2007「豊前・豊後における瓦質土器の初期様相」『第26回 中世土器研究会』発表要旨
原田昭一2005「中世大友府内町跡第9次調査区」『豊後府内2』大分県教育庁埋蔵文化財センター
松本康弘2005「中世大友府内町跡第13次調査区」『豊後府内2』同上



第65図 第13次調査区との関連

遺構一覽表

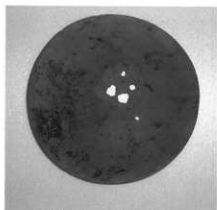
第1表 40次調査区遺構一覧表

本報告での遺構番号	旧遺構番号	遺構の性格	検出標高	遺構の時期	出土遺物
	S001	溝	4.60m	古世以降	備前焼
SD1	S002	溝	4.53m	近世以降	
SD2	S003	土坑	4.64m		なし
SP3	S004	土坑	4.18m	16世紀後葉～末葉	備前焼搦鉢
SK4	S005	土坑	4.50m	16世紀末葉～17世紀中頃	京都系土師器3期
SK5	S006	土坑	4.50m	16世紀後葉～末葉	備前焼大甕・政和通宝
SK6	S007	土坑	4.50m	16世紀後葉～末葉	
SK7	S008	土坑	4.50m	16世紀中葉～後葉	京都系土師器1期
SK8	S009	柱穴	4.50m		
	S010	柱穴	4.17m		
	S011	土坑	4.36m	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK11	S012	土坑	4.50m	16世紀後葉～末葉	備前焼搦鉢
SK12	S013	柱穴	4.17m		
	S014		4.172m		
	S015		4.960m		
	S016		4.951m		
	S017		4.957m		
	S018	溝	4.959m	17世紀中葉以降	
	S019	溝	3.82m	17世紀中葉前後	京都系土師器3期
SD19	S020				
	S021		4.270m		
	S022	柱穴	4.280m		
	S023	土坑	4.39m	16世紀後葉	ガラス
SK23	S024	土坑	4.315m	16世紀末葉	京都系土師器2期
SK24	S24の下	土坑	3.680m	16世紀前葉～中葉	図中に京都系土師器1点
SK50	S025	土坑	4.38m	16世紀中葉～後葉	京都系土師器2期
SK25	S026	集石	3.62m～3.9m	16世紀後葉～末葉	
SX26	S027	欠番			
	S028	欠番			
	S029	土坑	3.69m	17世紀中葉前後	京都系土師器1期
SK29	S030	土坑			
	S031	土坑	3.93m	16世紀末葉	京都系土師器3期
SK31	S032	欠番			
	S033	土坑		16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK33	S034	土坑		16世紀中葉～後葉	京都系土師器2期
SK34	S035				
	S036	井戸		16世紀中葉～後葉	
SE36	S037	柱穴	4.272m		
	S038	柱穴	4.684m		
	S039		3.255m		
	S040	柱穴	4.644m		
	S041	柱穴	3.3m		
	S042	遺物廃棄	3.23m以下	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
	S043		3.09m以下		
	S044	溝	3.38m		
SD44	S045	土坑	3.13m	16世紀前葉～中葉	
SK45	S046		3.4m以下	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK46	S047	土坑	3.2m	16世紀前葉～中葉	京都系土師器1期
SK47	S048	土坑	4.94m	11世紀	
SK48	S049	土坑	4.94m	11世紀	
SK49					

写 真 图 版



1区・2区発掘状況



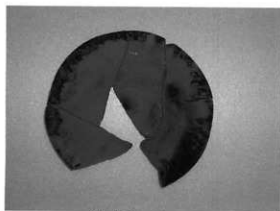
穿孔のある京都系土師器



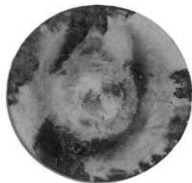
穿孔のある蓋



常滑焼



煤の付着した燈明皿



燈明皿



上部遺構検出状況



北壁断面 (SP30周辺)



SK11



SK24



SK26



備前焼擂鉢出土状況



2区16世紀前葉京都系土師器



最上層の攪乱遺構



SK 8



最下層



攪乱溝

SD 1 (右)



1区・2区上層遺物出土



SD44・SK47



1区・2区西部の16世紀



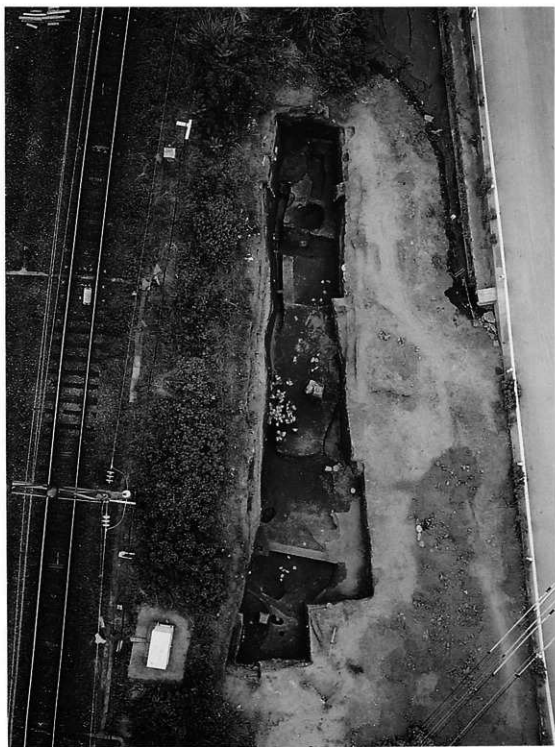
SD44



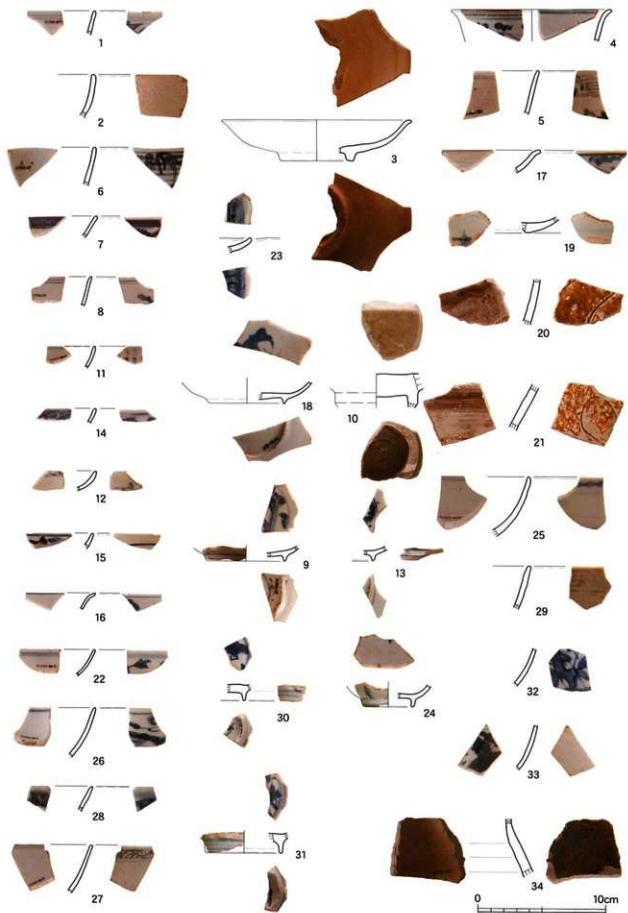
SK31

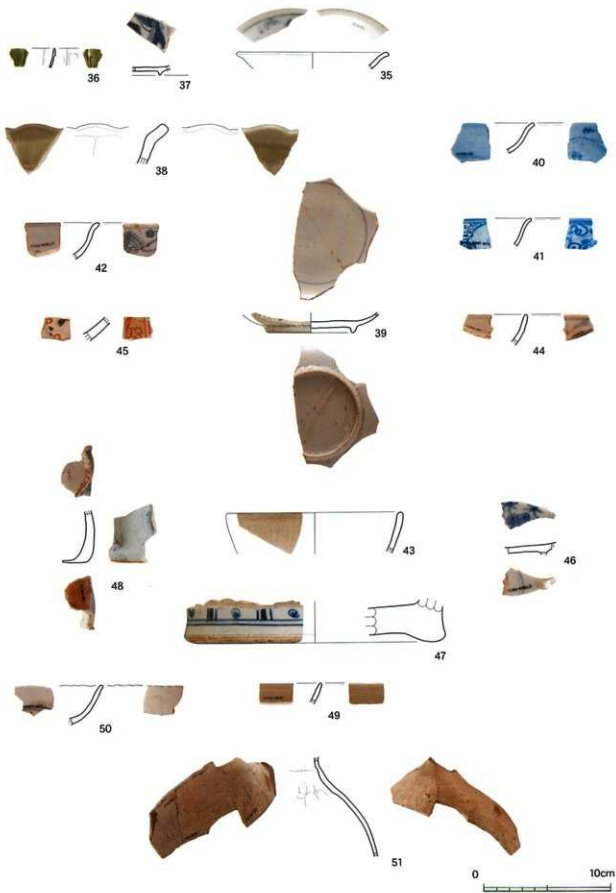


SK45



真上からの空撮写真





報 告 書 名 抄 録

ふりがな	ぶんごふない10ちゅうせいおおともじょうかまちあとだい40じちょうさ
書 名	豊後府内10 中世大友城下町跡第40次調査
副 書 名	大分駅付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(6)
巻 次	(10)
シ リ ーズ 名	大分県教育庁埋蔵文化財センター発掘調査報告書
シ リ ーズ 番 号	第26集
編 著 者 名	高橋信武
編 集 機 関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所 在 地	〒870-1113 大分市中判田1077
発 行 年 月 日	西暦2008年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °	東経 °	調査期間	調査原因
		市町村	遺跡番号				
大友 府内町跡 第40次 調査区	大分市元町	322	051	33° 13' 45.03"	131° 37' 09.12"	20040420 ~ 20040525	大分県周辺 高架化事業

豊後府内10

中世大友府内町跡第40次調査区

大分県付近連続立体交差事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(6)

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書 第28集

平成20(2008)年3月25日

編集・発行 大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市字中判田字ビワノ門1977番地
TEL (097) 597-5875

印刷 株式会社プリメディア
〒874-0923
別府市新港町1-13
TEL (0977) 23-3288
